
恋に脇役はツキモノだ。

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋に脇役はツキモノだ。

【Nコード】

N6682W

【作者名】

ヒロユキ

【あらすじ】

前代未聞、主人公不在の物語！？なぜか自らを脇役と信じ、演じ続ける少年、ひろかずはじめ広宇須創。そんな彼の周りには、不思議なことにいつだって一癖も二癖もある奇妙な人間たちが集まる。面白いことが大好物な劇団レディーバードの団長の魔手につかまり、彼は今日も東奔西走。そんな彼が片思いするのは「バンビ」と呼ばれる淑やかで可憐な美少女、こじかまみ小鹿万美。しかし、彼女にはすでに非の打ち所のない完璧な彼氏がいて……。青春時代の行き場のない思いを悶々と抱えつつも、少年は日々の生活の中で、奇妙奇天烈な事件に次々と

巻き込まれていく。果たして、恋の行方は？ 彼の未来は？ かなりシュールで、なんだかファニー、時々シリアス、雨のちサンシャインな青春脇役ストーリー。

プロローグ 物語に美少女はつきものだ。(前書き)

どうも、初めましての方は初めまして。他作品から引き続きお読み頂いている方は、また改めまして、よろしく願います。作者のヒロユキというものです。

この度はこのような珍奇な僕作品にご興味頂きありがとうございます。ご期待に添える作品になるのか、どうなのか、分かりませんが、精一杯頑張っていこうと思っております。

プロローグ 物語に美少女はつきものだ。

一つ、美少女の話をしよう。

この平々凡々たる僕がこの取るに足らず、語るに足らない、特筆すべき事項のまるで見当たらない短い人生の中で出会った、比類なき絶世の美少女の話だ。

彼女の名前は『バンビ』。

とある有名私立高校に通う女子高生だ。

町の高台にある、高級な住宅街に父と二人で住んでいる。

年齢は十七歳。誕生日は8月。

血液型はO型。星座占いはしし座。

左利きで、趣味は読書。好きな食べ物は杏仁豆腐で、髪型はセミロングのストレート。

性格は温厚で、誰にでも優しくとても気が利く。三歳の頃から始めたという習い事は、ピアノにバレエ、生花や料理など、多岐に渡り、中でもピアノの腕は様々なコンクールで優勝した経験もあるという話で――。

と、ちょっと待った。

つい語ってしまったが、ここでは、そんな彼女の細かいプロフィールなどはどうでもいい。

なぜなら、僕たちにとって一番有益となる彼女の特徴は、彼女が『紛れもない美少女』であるという事実であり、その情報の前には、他の情報など全て霧となって霞んでしまうからだ。

彼女がどれくらいの美少女かと言うと、おそらく、町中で彼女とすれ違った人からアンケートを取れば分かるだろう。

きっと十人中十人が、「あんなに可憐で美しい少女には、今生出会ったことがない！」と絶叫しながら答えるに違いない。

僕にはその確信がある。

そう、美少女！ 天真爛漫な美少女である。

まるで彼女は、この世の最果てにだけ存在する楽園に、ひっそりと佇み、仄かな芳香を放ちつつ咲き誇る花のよう。

あの潤んだ瞳は世界に溢れる純白な光だけを満たし、きれいで繊細な黒髪は絹のように艶やか、白磁の花瓶を思わす白い肌に、思わず支えてあげたくなるような華奢な体つきは少女らしい丸みを帯びている。

嗚呼、彼女が毎日、自宅の庭先の花壇に水をやるのを知っているだろうか？

清楚で飾らない浴衣を見にまとい、小さな日傘をさしつつ、絶妙なアングルで小首を傾げ、花壇の花々を一つ一つ愛おしそうに覗き込んでいるその仕草を、一目でも見たことがあるだろうか。

僕は見た。この目で見た。

その瞬間に、僕の魂はその形を失った。

ぐにゃっと、ぎにゃっと、為す術も無く驚掴みにされたのだ。

美しい、彼女は美しい！

まるで、妖精だ！ 天使だ！

そう僕の心は浮き足立った。思わず叫びたく鳴った。

目眩がするほどの高鳴る鼓動、体の中心を駆け巡る衝動。

嗚呼、と僕はため息を漏らす。

出来るならば彼女をこの腕の中に抱きしめてみたい。彼女を独り占めにしてみたい。きつと、彼女を知っている男ならば、誰もがそう思うに違いない。

しかし、しかしだ。

物事はそう簡単に思い通りにはならない。

そう、人生はいつだって残酷だ。

つまり、彼女には、もう既に、好き合っている「彼氏」がいるのだった。

それも、こんな凡人以下の自分が敵うことなどない、非の打ち所の無い完璧な彼氏だ。

僕なんかが、到底太刀打ち出来るものではない。

僕にとって、彼女は高嶺の花。僕のような人間が到底、手に入れる事の出来ない、空に瞬く一番星。

彼女と僕は吊り合わない。

僕には、そんな資格はない。

だからこそ、僕は演じ続けるんだ。

誰もが望むわけでもない、ただの『脇役』を。存在する意味などない、『脇役』を。

ただひたすらに彼女の幸せを願いながら、僕は、演じ続ける。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 1

「我が愚鈍なる後輩よ!!」

くろみやあかり
黒宮赤灯先輩は高らかにそう言い放つ。

「我が低能なる後輩よ! 世界一強かで賢く完璧な美女たる私が、お前に人生を利口に生きるコツを三つ教えてやろう!」

その自慢の赤と黒が入り交じったようにメッシュを入れた髪をひらめかせ、自ら世界一の美声と称するその声で、高らかに言い放つ。僕をそのすらりと伸びた美脚で踏みつけながら……そう、その踵でぐりぐりとごりごりと踏みつけながら、彼女は言い放つ。

「お前は残念なことに生まれつきどうしようもなく頭が悪いが、聞いて喜べ、この聡明で博識な才女たる私が、お前にその膨大な知識の山から、価値ある知恵を少しだけ授けてやる」

そして、黒宮先輩は僕にぶふう、とタバコの煙を吹きつけた。灰色のモヤが僕の眼前で渦を巻き、それが目に染みる。僕は涙を流しながら、大きく咳き込んだ。

「ちょっと、先ば……けほっけほっ、やめてくださいよ」

しかし、そんなことなどお構いなしに黒宮先輩は続ける。

「いいか? これさえ覚えておけば、お前はその取るに足らず語るに足らない最高に下らない人生を特に何の苦難も苦労もなく、それなりに乗り越えることが出来る」

「あの、お願いですから、この足をどけてもらえませんか？」

僕はなるたけ哀れそうな声で言ってみたが、先輩はそれを完全に無視をした。というより、「口答えするな」と言わんばかりにさらに深く踵を僕の脇腹にめり込ませてきた。

「うぐう！」

痛い。すごく。

「まずは、そのいち。ストレスをためない」

「ちよっと、あの……」

「そのにー。過去は振り返らない」

「あ、あの……」

「よく聞け、ひろうずはじめ広宇須創。ここが重要だ。そのさーん。先輩の言う事は絶対だ」

「え？」

それ、ただの命令じゃ。

そう思ったのもつかの間。

僕は先輩のその、自称、一目見ればため息が漏れるような美脚によって足蹴にされ、屋上の端の辺りまで転がされる。先輩は有無を言わせないし、僕は僕で為す術がない。

手も足も出ない、という言葉があるが、まさに今の僕の状態はそれなのである。つまり、縄でぐるぐる巻にされた状態のまま、まるきり地面を這う芋虫のような格好で、僕は学校の屋上にいるのだった。

その様子を見れば、きっと誰もが叫ぶことだろう。

それは一体全体どういうこと？　そう僕に訊ねたいことだろう。しかし、僕だって、可能ならば誰かに訊ねたいのだ。どうして僕が、こんな格好をしてまで、学校の屋上で先輩に踏みつけられないといけないのだ。

「うわあ……」

思わず、絶望のため息が出る。

これの一体どこが人生を利口に生きるコツなのだろう。このまま先輩の言う事を聞いていれば、きっと、いや間違いなくろくな人生にならない。

今の僕ならばその三つのコツに一つ付け足すことが出来る。

『先輩の言うことは信用するな』

うん、紛う事無き真実である。得体のしれない年上の、それも存在する意味が分からない劇団の団長と関わることは百害あって一利なしだ。

僕は、彼女ほどの変人をこれまでに一度だって見たことがない。僕の周りにはなぜかいつも様々な変人が集まってくるけれど、彼女の、面白ければなんでもあり、という恐ろしく単純でひたすら頑固なその生息、その生き様は、他の者の追隨を許さない。常軌を逸したモンスターのような物好きなのだ。

そして現在、その興味の矛先はただ一人の後輩、そう、この僕に向けられている。

ああ、この人生における最大の不幸を神は哀れんでくれるだろうか。

もしそうならば、今すぐに彼女を他校に転校させてくれ。遠慮はいらない。なんなら、学校の職員室に「我は神じゃ」と壮大なBGMと共に降臨して、教師たちに転校の手続きをするようお告げをし

てもいい。いや、頼むからそうしてくれ。

「広宇須、お前は何も怖がる必要はない。私に全てを委ねてしまえばいいのだ」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ」

僕は必死に叫ぶ。彼女がこれからしようとしていることを思いとどまらせるには、今が最後のチャンスだと思ったのだ。

「僕に考えさせてください。どうしても、『クラブの宣伝』だからって、こんなことをさせられないといけないのか」

しかし、

「口答えするな!!」

と先輩に一喝されてしまい、僕の反撃の糸口は儚くもしぼんでしまった。

「よく聞け、広宇須。宣伝には一種の『派手さ』が必要なのだ。それが無くては始まらない。他の湿気たクラブと同じように仏頂面のまま校門前でビラ配りをしてみる。新入生たちは見向きもしないまま光の速度で廃部まっしぐらだぞ。分かるか？ だから、そうならないよう、この巨大で華麗なる垂れ幕を校舎に大きく掲げる必要があるのだ」

そうして、先輩は僕の足元に括りつけられている紐の先を指さした。そこには、先輩が丹精込めて作り上げたのであろう垂れ幕があり、なかなか達筆な文字が大々的に書かれている。

「いいか？ 広宇須。人間は愚かしいほどに派手な物に興味を持つ生き物だ。それは人間の心がいつでも新しい刺激を求めてやまないからだ。毎日毎日同じもの、いつも通りのものではないつか飽きてしまう。うんざりしてしまうのだな。だから、他がやらないこと、他者より目立っているものに、我々の目は自然と向かう」

「は、はあ」

「つまり、我々が新入生たちの注目を集めるには、他のクラブより目立ったことをすればいい。それだけで、我が劇団の団員数はうなぎのぼりだ。屋上からこんな巨大な垂れ幕を降ろそうとする奴らなど、他にはいないからな、ハッハア！」

「そりゃそうですよ。生徒会執行部がそんなことを許可してません。ああ、こんなところを誰かに見られたらなんて言われるか。きっと、皆からの批判が殺到します」

僕が言うと、先輩は不機嫌そうに眉をピクリと動かして、睨んできました。

「そんなことはない。来るとすれば、目玉がくりくりとした心の純粹な可愛らしい新入生たちだ。もしくは、恋焦がれた男子生徒からの私へのラブレターの山とかだ」

それはねえ。絶対ねえ。

そう僕は確信する。

確かに、先輩はかなりの器量よしである。色白だし、きれいにすつと整った顔つきをしているし、この学校の中でも五本の指には入るほどの美人だと僕も思う。おそらく、密かに彼女に思いを寄せている生徒もいるのだろう。

が、しかし、いかんせん、この変態レベルの酔狂な性格がある。果たして、この世のどこにこんな女性を包み込める寛容な心を持った人間がいるのだろうか。いや、無理だ。いやしない。

いるとすれば、それは仙人だ。超人だ。宇宙人だ。
全く、大人しくしていれば、それなりにモテモテだろうに……。
しかし、そんな僕の気持ちなどまるで知る由もなく、先輩は続ける。

「ともかく、広宇須よ。この垂れ幕によって我が劇団の輝かしき栄光を惜しみなく新入生どもに知らしめることが必要なのだ。しかし、ただ垂れ幕を垂らすだけではまだ派手さが足りない」

分かるな、と先輩は僕の鼻先に指を突きつけた。

「そこでだ。生身の人間が重石になって垂れ幕と共にぶら下がることにより、心のピュアな新入生たちの度肝を抜いてやろうという算段だ。いいか？ さっきも言ったように、宣伝は派手じゃなくては始まらないのだ」

そうして、先輩は僕に有無をいわせる暇を与えないままに、紐でぐるぐる巻にした僕を再び蹴って転がした。為す術もない僕は今にも泣き出しそうな気分になりながらも、ついに屋上の端まで向かわされる。顔が半分だけ、屋上の端からはみ出すと、ひょうひょうと風が髪を舞い上げ、地上にまるでおもちゃのような人影が見えた。
瞬間、僕は背筋が凍りついた。

「嫌だー！ 何でこんなことを僕がしなくちゃいけないんですか！先輩がやってくださいよ！」

「ええい、往生際の悪い奴め。それ以上、弱音を吐くと三枚に下ろして酔漬けにしてやるぞ！」

「それも嫌だー！」

「じゃあ、大人しく落ちるんだな！」

がし、と先輩が僕の脇腹を踏みつける。もう逃げられない。

今や僕は学校の屋上の僅かな段差の上で、下に落ちる瞬間を今か今かと待ち構えている状態だった。

僕の運命は今や風前のともし火である。

この恐怖をどう表したらいいのだろう。身動きが全く取れない状態でバンジージャンプをしようとしている、この恐怖を！

すると、先輩が高らかに笑った。

「じゃあな、広宇須。もしも地面に落ちたら遺体の処理だけは責任を持って行わせてもらう。せいぜい肉片が飛び散らないように努力してくれ。少しでも掃除をしやすくするためにな」

「こんな時にまで大事な後輩をいたわる気持ちはねえの、か――」

その言葉を僕は言い切ることはなかった。

なぜなら、その瞬間、僕の体は宙になげだされた芋虫の如く、無重力に引っ張られながら、地上に真っ逆さまに落ちていたのだから。落下しながら見た、あのにやにやと笑う先輩の顔は忘れられない。もし僕があのまま死んでしまったら、最後に見た光景はあの先輩の悪魔的な満面の笑みということになるだろう。

それは困る。

嫌だ。絶対に嫌だ。

死ぬのなら、僕はあの美少女の膝下で死ぬのだ。彼女に大粒の涙をぽたぽた零してもらいながら逝くのだ。

嗚呼、死ぬ前に、一目でもいい。彼女と会いたかった。

グッバイ、我が短き人生よ。

薄れゆく僕の意識の中、校舎の壁に落ちていく僕に引っ張られる形で、大きな垂れ幕が風になびいた。

『劇団レディーバード、新入部生募集!!!!!!』

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。

2 (前書き)

9月20日、一部修正しました。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 2

この世には二種類の人間がいると僕は思う。

一つ目は話の聞き上手な人間と、もう一つは聞き下手な人間だ。

後者の聞き下手な人間というのは、一緒に会話をしていて不快になることが多い。例えば、こちらが話している最中に見当違いな相槌を打ってきたり、こちらの話の腰を折ってまで、自分のことを話したがつたり、どうでもいいことに対してあれこれと質問したりと、会話のテンポというものをまるで理解出来ないのだ。

この場合、話し手の方は自分の思い通りに話が進まないのだから、当然、気持ちが良いはずがない。

お前と話していると、つまらん！

と、なってしまう。

どちらかと言えば物事に寛容な僕であっても、そんな人とは、できるだけさっさと話をうち切って離れたいと思うだろう。

しかし、一方で聞き上手な人間というのは、話し手にとってその会話が心地良く感じるものだ。まず、彼らは余計なこととは言っていないし、きちんと会話に反応を示してくれる。話に自然なムードを作り上げてくれることで、話し手に負担が生じることもないし、むしろ、もっともっと話をしたくなるものだ。

会話のキャッチボールが上手くいく、というのはこういう事なのだろう。

そして、『彼女』の場合は、この、話の聞き上手な人間に当てはまる。僕は今まで幾度となく彼女とざくばらんな会話に花を咲かせてきたが、彼女ほど、話し相手に適した人間はいない。彼女とい

ると、まるで見えない糸に引っ張られるようにして脳内から次から次へと話題が出てくるのだ。

これは一種の魔法と言ってもいいかもしれない。

しかし、彼女の良さというのは、その点だけに留まらない。

というのも、彼女は『絶世の美少女』なのである。それはもう、とびきりの美人なのだ。

嘘だ、と言いたくなる気持ちは分かる。そんなはずはない、と僕を殴りつけたくなる気持ちも分かる。

話の聞き上手で、その上、美少女だと！

天は二物を与えずという理に反してはいないか。そんなことがあっていいのか。

これではまさに、完璧ではないか。

そう、彼女は完璧なのである。僕は確信している。

その美少女、バンビ、もとい、小鹿^{こじかまみ}万美は。

「——と、いうわけで大変だったわけですよ」

僕はうんざりするように、大きくため息をつきながら、そうぼやいた。

「全く、黒宮先輩のすることは毎回毎回普通じゃないんです。僕はもう何度命を失いそうになったことか」

僕がいるのは、夜の公園である。

子供たちが遊ぶ遊具の端っこにある、西洋風な丸みを帯びたデザインが施されたベンチに座っている。

公園の周囲には、まるでずらんの蕾のような形の可愛らしい外灯が置かれ、柔らかくぼわりとした綿毛のような光が夜の闇に浮かんでいた。

町の喧騒が聞こえない、静かな時間である。

「へえ、その方はとても面白い人なんですね」

すると、僕の隣で、彼女、小鹿万美が大きく頷きながら暢気そうに言った。

彼女はお気に入りだと言う、朝顔の描かれた青い生地 of 浴衣を着ている。静かな微笑を浮かべながら、小首を傾げる仕草をする（これは彼女の癖なのだ、なんと可愛らしいことだろう）と、髪の毛を留めている花の飾りがついた簪がしゅりんと鳴った。

「広宇須さん、とても楽しそうです」

僕はつい、彼女の優しい笑みにそのまま頷いてしまいそうになったが、寸でのところで思いとどまり、違う違うと首を振った。

「あのですね、小鹿さん。これは面白いわけでも楽しいわけでもないんです。危険なんですよ」

「え？ そうなんです？」

「いいですか？僕は今日、紛れもなく校舎の屋上から先輩に突き落とされたんです。危うく殺人事件ですよ、警察沙汰ですよ、事情聴取ですよ、死体処理ですよ。無傷だったのが、奇跡なくらいです」

「まあ……」

「分かりますか？黒宮先輩はそんなことを平然とやってのける人なんです。僕はそういうことを言いたいのです。あのですね、もし、小鹿さんみたいな綺麗な瞳のか弱い羊みたいな人がこのうちの学校に来たら、たちまち毛を刈り取られて丸裸ですよ。その場に運良く僕が居合わせればまだ八分刈りくらいで済むかもしれませんが、薄暗い校舎の影なんかで見つかった日にはきつと産毛の一本だって残りません」

僕がそう力説すると、彼女もようやくその重大性に気がついたのか、はっと息を呑んだ。

「そ、それは少し怖いかもしれません」

と怯えるように口を両手で覆う。

「広宇須さんの言い方だと、まるでその先輩は魔王のようです」
「そうですよ!」

それを聞いて、僕は大いに頷く。

「あの女性ひとは魔王なんです。他人の血と涙を啜り、絶望と失望を貪り喰って腹を太らす大悪党です! 一体これまで、何人の人間が彼女の足元で骨と化したか、きっと枚挙に暇がありません」

そして、そこで僕は少し調子に乗り、「ガッハッハ」と上体を逸らしながら、低い声で恐ろしげな笑い方をしてみせた。黒宮先輩がどれだけ魔王的で邪悪な存在なのかを表現しようとしたのだが、気がつくのと、万美嬢が頭を両手で覆ってぷるぷるしているのを見て驚いた。どうやら、僕の語りは予想以上の効き目があったらしい。

その美しい横顔を恐怖に引きつらせて、「怖い怖い」と呟いているのが分かる。

ついやり過ぎたと思い、僕は慌てて彼女に言い聞かせた。

「あ、あのですね、小鹿さん。これは例えの話でして、まるつきりそういうわけでは……」

しかし、そこで、僕の言葉を遮る形で誰かの怒声が響いた。

「こら、広宇須！ 何をやってやがる」

声のした方に目を向けると、公園の入口に誰かが立っている。よく見ると、その人物はギターケースを背中に担いだ長身の少年だった。

僕にはすぐに彼が何者なのか分かった。

彼の名は羽山跳治。はなやまちょうじ僕の一歳年上の高校の先輩に当たる人である。僕よりもがっちりとした肩幅を持ち、男らしくきりつとした無駄のない体つきをしている。そして、目を合わせると魂を掴まれたような感覚がするほど整った目鼻はまさに美男と呼ぶに相応しい。

そんな跳治先輩が肩を怒らせて僕と万美嬢が座るベンチにずんずんと歩いて来る。そして、その鋭い視線で僕を睨むと、ぽこり、と頭の上に拳を落とした。

「お前、万美を怖がらせてんじゃねえよ」

い、痛い。じゅん、と目尻に涙が溜まる。

「い、いえ、跳治先輩。僕はですね、そんなつもりはなくて、その、ですね」

「何だ？ 言い訳をしようってのか？」

ぐわり、と睨みつけられ、僕はちよつとひるんでしまった。

「だ、だから、僕はちよつと黒宮先輩の話をしていたところでありまして、ですからね、彼女にはちよつと悪魔めいたところがあるじゃないですか、だから、僕は彼女のその恐ろしさを、ですね……」

「うだうだ言い訳をするところが怪しいぞ。男ならはつきりと自信を持って身の潔白を表せ。それとも、もう一発殴られたいか？」

先輩の剣幕にひい、と縮こまる。
すると、そこに救いの声が聞こえた。

「跳治さん、止めてあげてください」

隣の万美嬢である。彼女はもう怖くなくなったのか、普通の様子に戻ってこちらを見ていた。

「広宇須さんが悪いんじゃないんです。私が少し怖がりなだけです。広宇須さんは私を怖がらせて困らせようとか、そんなつもりはなかったと思います」

「本当か、万美」

「はい、広宇須さんは悪い人ではありません。良い人です」

それを聞いて、羽山先輩はその結んだ拳を引っ込めた。僕はほつと安堵の溜息を漏らす。

「万美がそう言うんなら、これ以上の制裁は加えないでおこう、広宇須。しかし、今度妙なことをしたら、もう一発だぞ」

「そ、そんなこと、僕はしませんよ」

ぶんぶんと僕は首を振った。

「先輩も『長年の付き合い』なんですから、少しは信用してくださいよ」

そうなのである。僕と羽山先輩は元々、同じ中学の先輩後輩の関係だった。それから高校生になって現在に至るまで、五年ほど友人関係が続いているのである。ちなみに、中学校では同じテニス部に

所属していたこともあり、その面でも繋がり濃いは濃い。僕はテニスにおいても、勉強においても、人間関係においても、何倍もうわてな先輩のことを尊敬していたし、そのことを先輩も承知してくれていて、僕をよく可愛がってくれた。

さらに、その密な関係があったからこそ、僕はこうして、この小鹿万美嬢とも知り合えたのである。

そしてそれは、僕にとって嬉しいことでもあり、同時に、心に闇を落とす原因にもなった。

なぜなら、なぜなら――。

「悪い悪い。別にお前を信用していないわけじゃないんだが、万美に危険が及んではまずいからな。何しろ、俺の『彼女』だし」

そう、そうなのだ。

彼は、この可憐で儚げで天真爛漫な美少女の、彼氏、なのである。

彼と、彼女は好き合っている。

世間的に言うカップル、アベック、恋人……。

まあ、つまりはそういうことなのであって、どうということもないのだけれど。

こんなに可愛らしい少女がいて、そこに誰も近づかないということなどないわけであって、そしてそこに、こんなにお似合いな先輩がいれば、それはもう自然な流れというか、もはや、僕には為す術も無く、結論的に言って、二人は付き合っているのだった。

それはもう、公然と、それはもう、歴然と……。

「……」

「どうした、広宇須？」

「いえ、何でも、ないです……」

「そうか、まあいいや。ともかく、帰る前に俺のギターでも聴いていけよ」

そうして、先輩は颯爽と僕と彼女の間に座ると、ケースから愛用のギターを取り出して膝の上に乗せ、一度、ぽろんと音を出してみせた。

先輩はよくこうして、他人に歌を聴かせることがあった。話では昔からかなりの音楽好きで、よく練習したり、たまには作曲してしまいうこともあるのだという。

今日、万美嬢がこの公園にいたのも、そういう理由とのことだった。練習したばかりの曲を聴かせたいのだそうだ。僕の場合は、そんな彼女に偶然、学校からの帰り道に出会い、今まで一緒に話をしていたというわけなのである。

「いいですよ」

と僕は答える。

「聴かせて下さい」

と、瞳を輝かせながら、万美嬢が頷く。

先輩はようし、と腕まくりをして、ぽろろんと、弾いた。

すると、周囲の空気がまるでそのギターの音と共鳴するように、渾然一体となって、淡く優しいムードを作りだしていくような気がした。

ふいに流星が空からこぼれていくのが見えた。それと同時に、先輩の低くて力強く、それでいて優しい歌声が公園に満ちた。

のびのびと、なめらかに響く、音楽。

先輩の歌っている歌は、僕がよく知るロックバンドの曲だった。デビューしてもう十数年経つというのに、これといったヒット曲

もない、どちらかと言えば、世間的な認知度が低いマイナーなバンドだ。

けれど、僕は彼らの曲がとても好きだった。彼らの持っている底知れない力強さというか、何者にも染まらない純粹さというか、そういうものが、僕の心をいつだって刺激してきた。

その感動が再び僕の心を満たしている。

曲が終わって、僕が、

「良かったですね」

と言い、

「そうですねー」

と万美嬢が相槌を打った。

先輩はそれを見て、満足したように微笑んで、「だろ？」とギタ―をまたぼろんと鳴らした。

「音楽って、イイよなー」

こうして、春の日の夜は穏やかに僕ら三人を包んでいった。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 3

次の日の放課後、僕はホームルームを終えると、すぐさまある場所に向かった。そこは、黒宮先輩が部室と称する学校の空き部屋だった。生徒も教師さえもあまり立ち寄ることのない校舎の最上階、通路の一番奥に、その部屋はある。

僕が急ぎ足でそのドアをくぐると、案の定、先輩は先に来ていた。陽の当たらない埃っぽい部屋の窓を開け放ち、その窓に腰をかける格好で、またタバコを吸っていた。

部屋にはその先輩が吸っているタバコの煙が充満していて（全く、教師に見つかったらどうするつもりなのだろう）、僕はその煙たさを我慢しつつ、先輩の傍まで歩いて行った。

すると、黒宮先輩は放心している様子で、僕が室内に入ってきたことをすぐには気がついていないようだった。後二三步で先輩の元にたどり着くというところで、ようやく、顔を上げ、僕を見る。

その目は、寝起きのようにぼんやりとして焦点が合っていない。

「ああ、広宇須か」

いつもの先輩らしくないガラガラ声で言った。

「我が愚かなる後輩よ、遅いではないか。お前を待ちくたびれてもうタバコを十本も吸ってしまった」

そして、先輩は足元に置いている灰皿を指さした。そこには確かに、先輩が吸って短くなってしまったタバコの吸殻が十本以上も押し込まれていた。

全く、若い時からこんなに吸って癌にでもならないといいのだが。
僕は密かに先輩の将来を危惧する。

「っていうか、先輩」

「何だ？」

「こんなに吸ってるって、もしかして、さっきの授業サボってたんじゃないんですか？」

「あん？」

「だってどう見ても、ホームルームが終わってからの時間で吸える量じゃありません」

すると、先輩は頭をぼさぼさと搔いて、記憶を探っているようだった。どうなんですか、と再度僕が訊ねると、

「そう言えば、授業をサボったような気もするな」

そう言った。僕は呆れてため息をついた。

「気もするな、じゃないですよ。そんなことをしていて留年でもしたらどうするんですか？」

「それはお前が心配することではない、広宇須。私は世界一聡明な美女だ。授業など出なくてもテストの点数はいつだって満点なのだ。平常点など気にしなくても卒業するのに差支えはない」

気だるい感じにそう言うと、先輩は大あくびをした。

と、その拍子にタバコの灰がぽとりと先輩の制服の上に落ちる。

「あー！」

僕はそれに気がついて慌てて駆け寄ると、手でその灰を払い落と

した。危ない危ない、制服に穴が開く所だった。

「おお、すまないな。我が低俗なる後輩よ」

「すまない、じゃないです。気をつけてください。火傷しますよ」

少し語気を強めて注意すると、先輩は珍しく、少ししゅんとした。

「あ、ああ。悪い」

と目をすぼめ、悪事を咎められた子供のように居心地が悪そうに視線を逸らす。そして、おずおずと僕に訊ねた。

「広宇須。それで、連れてきたのか？」

「連れてくる？ 一体誰のことです？」

僕はきよんとする。

はて、何のことだろう。

「だ、だから、私が持つケタ違いのカリスマに魅了された、目玉がくりくりとした好奇心旺盛な可愛らしい新入生たちのことだ」

と少し恥ずかしそうに言う。

「部室の前には彼らが大笑して押し寄せているのであろう？」

僕は呆気にとられて、しばらくして肩を落とす。

「いませんよ。そんな生徒」

「嘘をつけ。あれだけ昨日は宣伝したのだ。誰もいないということはないだろう？」

「残念ですが、人っ子ひとり」

「じゃ、じゃあ、私への愛の込められたラブレターの山は？」

「それもあります」

そこで先輩はさらに何かを言いかけたようだが、途中で口を閉ざしてしまった。

悲しげにため息をつく。その瞳は生気を失ったように、濁った色をしていた。

一体、この先輩の様子の変わりようはということなのか。
それには、もちろん、理由があった。

昨日のことである。

僕が悲劇的に、学校の屋上から芋虫状にぐるぐる巻きのまま突き落とされた後、予想外のことが起こった。

垂れ幕は先輩の思惑通り、校舎の上に、立派にはためいたそうなのだが、その下で気を失ったままぶら下がっている僕を通行人が見つけ、そのまま110番通報をしたのである。

つまり、どういうことかというと、事件発生ということで、パトカーが校門前に到着、警察沙汰になったのだ。

あまりの大事に心配させてはまずいと思い、昨日万美嬢には言わなかったのだが、実は彼女に話した殺人事件の一手前まで事は進んでしまったのである。

その後、僕たちは警察から散々嚴重な注意を受け、教師たちからはこれでもかと怒鳴り声で罵られ、他の生徒達からは奇異の眼差しを向けられる結果となった。

まあ、つまり、悪い意味で大目立ちをしてしまったのだ。よく停学や退学といった処分を下されなかったものだ、不思議に思ったくらいの嵐の大騒動だった。

そしてこれには、さすがの先輩も精神的に堪えたようで、ようやく家に帰れるとなった時には、いつもの十分の一の覇気しか漂っていなかった。背中を丸め、目を細くうつろに開いた先輩はまるで餌に飢えたか弱い子猫のようにも見えたほどだ。

もし、道端にあんな少女が転がっていれば、誰でも手を差し伸べたくなることだろう。

しかし、きっと彼女のことだから明日になれば大丈夫だろうと高を括っていた僕は浅はかだった。

今朝、校門ですれ違った時に見た先輩の寝不足気味な横顔を見て、ようやく僕は事の重大性に気がついたのである。

事件の影響は先輩にとって想定以上に甚大だったのだ。

身から出た錆と言え、もうそれ以外にはないのだが、これだけ意気消沈している先輩というのは、見ていて放っておけない。そう思っ、僕はいち早く放課後の部室に駆けつけたのである。

僕はしばらく無言で立ち尽くしていたが、あることを思い出し、すぐに先輩からタバコを引き離すと、狭い部屋の机の椅子に先輩を座らせた。そして、水筒から紅茶をコップに注ぐと、先輩に差し出す。

すぐに煙臭かった部屋が、浄化されたように、香しい匂いが広がった。

「ほら、黒宮先輩。これを食べて少しは元気を出してください」

僕がそう言ってカバンから取り出したのは、学食で売られている惣菜パンだった。食欲をそそる匂いが漂う。

すると、それを見るや否や、先輩の眼の色が変わった。

「そ、それは『たらこソーセイジパン』ではないか。どうしたのだ、

それは！」

「先輩が欲しがるかと思って買ってきたんですよ」

「おいしい、これは、毎日十食しか売らないという超人気商品だぞ。私の超絶な権力を以てしても、手に入ることは少ないというのに、お前、どうやって？」

先輩は信じがたいと目を丸くしている。それを見て、僕は自慢気に腕組みをして言った。

「別に、授業が終わった後にダッシュで買いに行っただけです。争奪戦に巻き込まれて脇腹に痣が出来ましたが、それくらい、何というでもないです」

「そうか。それが事実ならば、よくやった、我が低能なる後輩よ！」
「……あの、こんな時ぐらい普通に後輩って呼んでくれないんですか？」

「何を言う。私の天才的なセンス溢れる呼び名をそう簡単に変えるわけがないだろう。やはり、お前は馬鹿だな」

「……はいはい」

「よし。では、食すか」

そして、先輩は待ちきれないという風に、パンの包み紙を取ると、もぞもぞと制服の胸ポケットから小さな瓶を取り出した。

先輩愛用の唐辛子の瓶である。

そして、

「こうして食べるのが一番美味だな」

と、パンの上にその赤い粉をこれでもかとふりかけた。

健康に悪そうだな、と僕が思う中、先輩は一気にパンに齧り付く。獣のように、むしゃむしゃと頬張る。とても満足そうだ。

「うむ、やはり、旨い！」

僕はそんな先輩を見ながら、静かに紅茶を飲んだ。

ようやく、いつもの先輩の元気が戻ってきたようだ。これで一安心である。

しかし、そこで僕は先輩の目がじっとこちらを見つめてきていることに気がついた。居たたまれなくなって、理由を訊ねる。

「どうしたんです？」

「いや、お前は食べないのか？」

ああ、そういうことか。

「一つしか、買えなかったので」

「……そうか」

すると、先輩は、何を思ったのか、既に半分ほど食べていたパンを睨むと、少しだけ悩んで、おもむろにそれをさらに半分ほど千切った。

そして、その片割れを、ぶっきらぼうに僕に手渡してきた。

「ほら、食べろ。命令だ」

「え、いいんですか？」

「た、べ、ろ！」

いつもの有無を言わさない先輩の鋭い眼だ。僕は慌てて受け取って頭を下げる。

「ああ、はい。命令ですね。ありがとうございます」

「礼などいらん。お前は私の命令を聞くだけでいいのだ。分かったなら、さっさと食え」

「分かりました。ではさっさと食います」

僕は先輩から受け取ったパンを早速口に入れた。たらこソースとソーセージの絶妙なバランスのおいしさが口に広がるが、同時に唐辛子の猛烈な辛味に体中から汗が噴き出た。ひりひりと舌が痺れるのを我慢しながら、しばらく、先輩と僕でむしゃむしゃと無言でパンを食べた。

それは何だか居心地の悪いような、うれしいような複雑な緊張感のある時間だった。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 4

パンを平らげると、僕と先輩は特にすることもなくなったので、適当に部屋でくつろぐことにした。

先輩はカバンから携帯用ゲームを取り出し、僕は僕で携帯用の音楽プレイヤーのスイッチを入れ、耳にイヤホンをして再生ボタンを押した。机に足をかけ、ギコギコ前後に椅子を揺らすというちょっとした行儀が悪い格好で、ロックを聴く。

しかしこれでは何のクラブなのか、いよいよ分からないな、と僕は思った。

先輩と二人で、こうして、放課後の時間をだらだら過ごすだけでは、とても有意義なクラブ活動を行っているとは御世辞にも言いがたい。

こんな状態では、ここは部室というよりも、単なる駅の待合室と大差はないだろう。

では、そうならないよう何かクラブ的な活動をすればいいではないか、という声もちろんあるに違いない。

だが、生憎それも無理だ。

というのも、確固たる事実として、このクラブは、特に何かをするための部ではないのだ。

阿呆なことを言うな、そんなことがあるのか、そう言いたい気持ちには分かるが、残念ながら、そうなのである。

『劇団レディーバード』

ちなみに、それがこの部の名前である。

何だか仰々しくも劇団などつけているが、それにも特に意味はない。

これは僕が先輩から聞いたのだが、先輩はただそう名乗りたかったから命名しただけであって、単なる気分過ぎないのだ。

正直、こんないい加減でよくクラブの申請の許可が降りたものだと思議に首を捻りたい気持ちである。

劇団のくせに、演技の練習もしないし、脚本も書かない。発声練習もしないし、当然、コンクールにも出場したりしない。

まあ、こんな具合に存在する目的もあやふやなのだから、当然の帰結として、どんなに派手な宣伝をしようとも、この部に新入部生など来るはずがないのだ。

それも、この劇団の団長が、昨日のような破天荒なことを平然とやってのける危険人物だとしたら、尚更だ。

誰もが近寄ろうともしないことだろう。

しかし、

しかし、だ。

一応劇団員である以上（ちなみに、僕がこの部にいるのは、黒宮先輩から強引に引きこまれたのだ）、僕も、このマイナスしかない劇団のイメージを払拭出来ないか、と思うことはある。

これは嘘ではない、本心だ。

やっぱり、先輩の犠牲者、もとい、先輩を慕う後輩は一人よりも二人、二人より三人と、多いほうがいいし。

そうなれば、突発的な劇団の危機（例えば、突飛で奇想天外な先輩の行動を思いとどまらせるとか）にも対応しやすいだろう。

では、そうするにはまず、どうすればいいのか。

僕は横目で、ちらりと机の向こうを窺った。先輩は先ほどからゲームに熱中しているようで、こちらの視線に気がつかない。

まあ、まずはこの先輩の危険人物という厄介なレッテルを剥がすための努力をするべきだろうな。

トラブルメイカー

目的ははっきりしなくとも、身の危険がないクラブだということが学校に広まれば、少しは興味を示してくれる生徒が増えるかもしれない。

しかし、それには、どうやって？

「うーん」

と僕は顎に指を当て悩む。

そこが一番の難問である。そもそも、そんなことが可能なのだろうか。

三つ子の魂百まで、という言葉もある。こんな珍奇な性格のままで立派な高校生となった彼女にいまさら人生の方向転換など、無茶なのかもしれない。

だが、完璧にとは言わないものの、せめて少しでも先輩に大人しくなってもらわないと、僕が困る。場合によっては、命に関わる問題かもしれないのだ。

今は昨日の事件で懲りている様子だが、すぐに以前の勢いを取り戻して、また昨日のようなことをやらかすことだろう。そうなれば、僕の身の安全は保証できるものではない。

では、どうしよう。さあ、行き詰まったぞ。

そうして、ふいに、制服のポケットに手を入れた時だった。

「あれ？」

何かが手に触れ、引っ張り出してみる。それは、A4サイズのカラーのチラシだった。

そこには、

『茶道教室、一日無料体験』

と、銘打たれている。

ああ、そうか。

僕は思い出した。これは、昨日の公園であの美少女、万美嬢からもらったチラシなのである。彼女は昨日、これと同様のものをまだ何枚も持っていて、跳治先輩にも一枚渡していたのを覚えている。何でも、彼女が通っている生花教室の先生にチラシをもらい、行ってみないか、と彼女が薦められたのだそう。

『確か、その先生の知り合いの先生が主催するものらしくって……』

昨日、彼女は目尻の辺りに人差し指を当て、思い出しながらそう言った。

『私も是非行ってみたかったですけど』

『けど？』

『実はその日、私は他の用事があったて行けないのです』

彼女が残念そうな顔になり、僕も何だか、悲しい気持ちになった。話によると、その日は町まで父親と一緒に出かける予定があるのだそう。

しかし、世の中、予定が重なってしまうことは、よくあることである。僕らは常に手持ち無沙汰な暇人なわけでない。

僕ならば、その先生に他の予定があることを告げて、お断りするだけだろう。

しかし、彼女は違った。自分が行けないのであれば、代わりに、周りの人間に少しでもそういった催しがあることを知ってもらおうと考えたのである。彼女がチラシを多く持っていたのはそういう訳なのだ。

なんと殊勝な心がけだろうか。自分も見習わなければならない。彼女の行動に感動した僕は、気がついた時には何度も頭を上下さ

せて頷いていた。

『是非是非行かせてもらいますとも、他でもない小鹿さんからのおすすめですし』

『本当ですか、嬉しいです。では、もし行かれたら、今度そのお話を聞かせて下さいね』

と、こんな具合いで、僕は茶道教室に行くことになったわけである。

しかし、いざ冷静になってみると、いくら彼女から薦められたからと言って、さすがに男一人でそんな場所に行くのは気が引ける。なんというか、緊張するし、変な目で見られたくないし……。

そんなことを考えつつ、昨日の晩は行くか行かないかで、一人悶々としていたのだ。

けれど、僕はそこで思いついた。

そうだ、これだよ。

これに先輩を誘って行けばいいじゃないか。そうすれば、自分は彼女の付き添いという自然な形で教室に参加出来ることになる。

そしてなにより、このおしとやかな雰囲気溢れる教室に彼女を通わせる良いきっかけにもなるかもしれない。もし彼女が茶道を気に入る、この教室に通えば、この粗雑な性格を治すことも出来るのではないだろうか。僕はそう考えたのである。

何しろ、茶道の作法というものは、とても厳しいものだとはよく耳にする。一つ一つの道具の扱い方から、細やかな動作の順序まで、詳しく決まりがあるらしいのだ。

先輩がその中で社会の厳しいルールというものを同時に理解してくれば、きっと、万美嬢のような、奥ゆかしくも愛らしい美少女になることであろう。そうなれば万々歳、言う事なしの結果である。これはきつと神が与えた僕へのチャンスなのだ。

そう確信して、にじしし、と僕は心の中で笑った。
ようし、そうとなれば、善は急げだ。

「先輩、聞いてください」

と、声をかける。

すると、黒宮先輩は、ゲーム画面から目を離し、面倒そうにこちらを見た。

「何だ、下等生物一号」

「あの、僕の呼び名が以前より酷くなってますよ」

「気のせいだ。それより、なんの用だ？」

「これです、これ。これを見てください」

僕は机の上に先ほどのチラシを広げてみせた。黒宮先輩はそれを覗き込む。

「ん？ さどーきょーしつ？」

「そうです。知り合いに教えてもらったんですが、近々、この近所で開かれるらしいんですよ」

「それがどうした」

「だから、僕と一緒に行きませんか、ってことです。たまには、こういう趣深い文化に触れて、日々の生活で疲れた心を洗い清めてみませんか？」

「急に妙なことを言い出すのだな。お前、さては何か企んでるだろう」

いきなり凶星を突かれ、僕はぎくりとしてしまう。

「そ、そんな滅相もございませんです」

「語尾がおかしいぞ」

「そ、そんなことはないでございますよ。僕はいつもこうでありますよ」

先輩は僕を怪しんでじっと睨みつけ、僕は僕で先輩に怪しまれて、そのまま存分に睨まれた。

「まあ、いい」

再び先輩がチラシに視線を落とす。

「しかし、茶道か……」

「経験がお有りで？」

「いや、ない」

これまた清々しいほどにきっぱりとした言い方である。

「ただ、たまにはこういうのも有りかなと思ってな」

おっと。

これは、イエス、の意味だろうか。

「毎日毎日、部室でお前の顔を見ているだけでは退屈だし」

「えっと、それじゃあ……」

「うむ。この茶道教室とやらに行ってみるか。たまには私の若く進ほとばしる才能を世の凡人たちに知らしめてやらんといけないしな」

そうして、先輩は僕をずばっと指差す。

「当然、お前は付き添いだ」

それに対し、僕が元気よく返事したのは、言うまでもない。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 5

茶道教室の日がやってきた。

僕はその日、少しだけ早起きをすると、先輩を家まで迎えに行き、それから二人でバスに乗って目的地へと向かった。

チラシによると、僕達が向かおうとしている会場は、町の北寄り、田園地帯の一角にある古いお屋敷とのことだった。僕がそれを告げると、先輩はあからさまに不快な顔をした。古いところは嫌だの、かび臭そうだのと勝手な事を言い始める。どうやら、自分のイメージとそぐわないことが気に食わないらしい。

だが、実際にバス停から歩き、そのお屋敷を目にするとところまで行くと、彼女は思わず、おおと声を漏らした。

「なかなか立派な日本家屋ではないか」

と建物を指さしながら言う。

広い田んぼの真ん中に、どんと大岩のように建っているその家は、周りを高い白塗りの塀に囲まれ、いかにも強い武将が住んでいそうな迫力のあるものだった。入り口には重々しい木製の門があり、その向こうには、情緒溢れる庭の風景が広がっていて、家にたどり着くまでも少し距離がありそうだ。門から家まで二三歩の僕の家とは大違いである。

どこか近寄り難い厳かな雰囲気の中、僕と先輩は屋敷の前までたどり着いたはいいいものの、そこからどうすればいいのか、思わず顔を見合わせてしまった。

自分たちがずいぶん場違いなところに来てしまったのではないかと尻込みをしてしまったのである。

とはいえ、周囲に逃げ込めるような場所もなく、そのままじつと

しているのも不審者のようであつたので、先輩に背中を押されるまま、僕は屋敷の門からゆっくりと中へ足を踏み出してみた。

「ご、ごめんくださいーい」

僕の自信なさ気な声がか細く屋敷の中に消えていく。こんな声ではおそらく誰にも聞こえていないだろうと思つたのだが、意外にも遠くから返事をする声が聞こえた。しばし石畳の上でぼーっとしていると、屋敷の玄関から、綺麗に髪を結った和服姿の女性が歩いてくる。

「あらあら、こんにちわ」

外まで聞こえそうな、よく通る快活な声である。

四、五十代ほどのその女性は、どこか凜とした静かな覇気を漂わせた人だった。目を細めて柔和な笑みを浮かべ、僕に丁寧にお辞儀をする、「茶道教室に来られたのかしら」と聞いた。

もしかすると、今日の茶道教室の先生だろうか。

僕はどぎまぎしながら、失礼のないよう、事前に予約を取つていた旨を伝え、名前を名乗る。すると、その年配の女性は承知しておりますとこれまた丁寧に頭を下げ、中に案内してくれるようだった。言われるがままに僕と先輩はその立派な屋敷の中に入っていくと、とある座敷に通された。

どうやら、そこが待合室となつていらしい。

僕がおずおずと部屋の中に入っていくと、そこには既に数名の中年女性が輪になって座っており、なにやら談笑しているところだった。皆、いかにも茶道教室にふさわしそうな綺麗な和服を身にまとっている。僕達が座敷に足を踏み入れると、彼女たちの視線が一気に集まつた。

無理もない、あまりにも場違いに見えたのだろう。学校の制服姿

のまま、一体何をしに来たのか、と思われているのだろうか。

しかし、その考えとは裏腹に、彼女たちはすぐに砕けた笑みを浮かべ、僕を手招きして話の輪の中に導こうとした。

「お若いのに、茶道のお勉強？」

「緊張しなくてもいいから」

「今日はどうやって来たの？」

いきなり、いろいろと喋りかけられ、さらに僕は困惑する。ただでさえ、こういう場に慣れていないのだ。緊張で「あの、あの……」という具合のたどたどしい言葉しか出ない。すると、一人の女性が、

「ほら、彼女さんもこっちにいらっしやいよ」

と背後の黒宮先輩も話の輪に引きこもうと声をかけた。僕が振り返ると、先輩のその表情には、やはり僕と同じ緊張の色が見て取れた。額から冷や汗が垂れ、目が不自然に泳いでいるのが分かる。

普段、僕は彼女のそんな顔を見ることはないので、暢気にも何だか珍しいものが見れて幸運な気持ちになった。

先輩は小さくかぶりを振る。

「いえ、私たちは向こうで待ってますから」

そうして、襖で仕切られた隣の座敷を指差す。そんなこと言わなくても、と引き止める女性たちを無視して、座っている僕を引っ張り上げると、強引に隣の部屋まで引きずっていった。

そして、襖を閉め、隣の部屋との間に完全な仕切りを作ると、僕の手を離した。

ふう、と大きく息を吐き、

「ここは妙なところだな」

と先輩は言った。

「どうにもいつもの調子が出ない」

それは僕も同感だった。普段から適当で怠惰な学校生活しか送っていない僕らにとっては、こういう静かで品のある世界というものは、異世界のように感じるのだ。否が応にも曲がった背筋を伸ばされるとても表現すればいいのか。無言の圧力とでもいうのか。

そうしなければいけないような気がするのである。

「息が詰まる」

先輩は座敷の奥まで歩くと、その襖を開け放った。すると、そこから麗らかな春の陽光が覗き、美麗な庭の風景が飛び込んできた。どうやら、この部屋は入り口から見えた庭の正面に位置しているようだ。

そこには、いかにも日本建築を思わす、選定された松の木や、石造りの橋、鯉が泳いでいる小さな池が見えた。

ころころと耳元を転がるような水音がする。長閑な春風が先輩の髪を揺らした。

「ふう……」

先輩は長い溜息をついて、その場に座り込んだ。僕も隣まで行ってあぐらを掻いて座った。

二人でしばらく、そうしていたと思う。横のほうからは先程の女性たちの話し声が聞こえ、目の前の庭からは鳥たちのさえずりが聞

こえた。

どのくらいした時だろうか。

「泳げ」

先輩が唐突にそう言った。

「……はい？」

何かの聞き間違いかと思い、半分眠気に誘われていた僕は聞き返す。

「なんででしょうか？」

「だから、泳げ」

「泳げって、何を言ってるんですか。ここは海じゃないですよ」

ご冗談を、と僕は愛想笑いで先輩を見る。しかし、その横顔が笑っていないのを確認し、彼女が本気で言っているらしいことを理解した。

「水ならあるだろう。ほら、その池だ」

「……」

僕は絶句した。

また、始まったぞ。いつもの先輩の病気だ。

「シンクロナイズド何とかがあるだろう。あんな風にやってみせて、私を喜ばせろ」

あんたはお殿様か何かか、と僕は突っ込みたくなる。いくら暇だ

からといって、後輩になんと無茶苦茶な注文するのだろう。

「無理、です」

さすがに僕はそう答える。

比較的暖かな春の日だといっても、この季節、水はまだまだ冷たい。こんな池で泳げばきっと風邪を引いてしまうだろう。シンクロナイズドスイミングなど、以ての外だ。

というか、そもそも僕たちはここへ茶道を習いに来たのだ。どうして泳ぐ必要なんてあるのか。

しかし、先輩の言葉は無情だ。

「つべこべ言わずに泳げ」

そうして、僕の首根っこを掴んだと思うと、ずるずると引きずり、有無を言わせないまま、いきなり僕を池の中に放り込んだ。

ずいぶん馬鹿力だと感心している場合ではない。

ばしゃああん、と派手な水しぶきが上がり、気がついた時には僕の体は水の底に沈んでいた。服の間から冷たい水が一気に流れこみ、僕の中から眠気という眠気を一気に追い出した。

「うひゃああ！」

僕は必死にもがきながら、水面に顔を出し息を吸い込んだ。押し寄せる波の中でじたばたと僕は無様に、翻弄された。水中できらきらとしたあぶくと鯉の鱗が見える。

まずい、溺れる。

と思った時、足が底についた。

何ということはない。たかだか家の庭に作られた人工的な池なのだ。水深は一メートルもないだろう。僕はそれを思い出す。

水を吐き出しながら、僕が池から立ち上がると、先輩は大笑いをしていた。

「いいぞ、広宇須。傑作だ。お前は何をしているんだ？」

何をしているも何も、あなたが僕をここへ突っ込んだんでしようが。

「あとう、この後どうするつもりなんですか？」

「何が？」

「これから茶道教室があるんですよ？　こんなに水浸しで泥臭い格好じゃ、受けられるわけじゃないじゃないですか。畳がびしょびしょになっちゃいます」

「あ、ああ、そうだなー」

きっと何も考えていなかったに違いない。先輩の呆然とした表情を見れば分かる。

「それに、このままじゃ僕は風邪を引きます」

「よし」

と、先輩は手を打つ。

「じゃあ、そこらへんを走りまわって服を乾かせ」

僕は大きくため息をついて、肩を落とした。全く、この先輩と来たら、後先考えずに行動に出るのだから、考え物だ。これだから、数日前の騒ぎだって警察が駆けつけることになるのである。

僕が途方に暮れていると、遠くの屋敷の廊下を先ほどの女性が歩いて来るのが見えた。僕たちを入り口から待合室まで連れてきた人

物である。

その女性は僕と目が合うと、驚いた表情をして早足にこちらまで向かってきた。下駄を履いて庭に出てくる。

「あらあら、どうしちゃったのかしら。びしょびしょじゃない」

と心配そうに僕を見た。

「ええ、と、その……」

申し訳ないやら、恥ずかしいやらでしどろもどろになる僕に、先輩が先を越して説明をした。

「馬鹿だから、池に落ちました」

余計なことを！

僕はよっぽどそう叫びたかった。

ああ、この地球上から消えてなくなりたい。頭の中が真っ白になってくる。

さすがに高校生にもなって水遊びをしていたと思われるのは嫌だ。そう考えた僕は弁解をしようと試みたが、その女性は濡れた僕の手を引っ張ると屋敷の方へ引っ張った。

「着替えを用意してあげますから、こちらへいらっしゃい」

僕は情けなくなりながらも、

「あ、ありがとうございます」

とへこへこ頭を下げた。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 6

僕はびしょ濡れのまま、その女性にとある部屋の前まで連れて行かれた。

「ここで少し待っていてくださいね」

と言われ、「ああ、はい」と気の抜けた返事をし、その場に呆然と立ち尽くす。女性はそのまま部屋の中に入っていつてしまった。どうやら、着替えを準備しているらしい。

じっと立っていると、いつの間にか、べったりと張り付いた髪の毛からボタボタと雫が垂れてくる。服は水を吸ってずっしりと重い。廊下を風が拭けば、体が冷えて身震いがした。

まるで、この屋敷に住みつく幽霊になったような気分だな。

と、僕は思う。

大昔、この家の主人と喧嘩をして機嫌を損ね、池に沈められてしまった、哀れな町人の幽霊である。

彼はこの世に未練を残し、夜な夜な自分を殺したこの屋敷の主人の枕元に立つ。主人が驚いて身を起こすと、そこにはその町人の姿はなく、枕元だけがじつとりと、まるで何者かがたった今まで立っていたかのように濡れているのだ。そして、その部分に顔を近づけて匂ってみると、どこか血なまぐさいのだという。悪事千里を行くのことわざ通り、その怪談は瞬く間に町中に広がり、やがて、その屋敷についた名は、「濡れ枕屋敷」。ついに、恐怖に気が狂った屋敷の主人は、ある夜、外に飛び出し、近くの古池に転げ落ちて……。

と、そんなどうでもいい事を考えていると、目の前に先程の女性

が立っていることに気がついた。

よく見ると彼女はその手に服を持っている。藍色をした古風な着物である。浴衣に似ているが、それよりも袖が幾分短い。ちょうど半袖くらいに切り取った感じだ。

「これ、夫の甚兵衛^{じんべえ}なんだけど、これを着てもらえる？ 生憎高校生が着そうな服は持ってなくて」

申し訳なさそうに表情を曇らせてその女性が言うので、僕は恐縮した。

「そ、そんな。わざわざ代わりの服を用意して頂いただけでも有り難いです」

服を受け取り再びぺこぺこ頭を下げる。

「本当にご迷惑をかけました」

「ふふ、いいのよ。あなたは礼儀正しそうな子だし」

そう言って、彼女は口元に皺を寄せて笑った。その笑みは、先輩のように相手を上から見下ろすような高飛車な感じはせず、反対にどこか謙遜した控えめな印象がある。こういうのを品があるというのだろうか。となると、先輩は下品ということになるのだが、いや、別にそういうわけじゃないのだ、ほんとに。

「そう言えば、まだお名前を伺っていませんでした」

ふと僕は思い出して訊ねた。

「失礼ですが、あなたは？」

「あらあら」

すると、その女性は目を大きく見開いて、口を手で押さえる。

「これは私としたことが、自己紹介を忘れるなんて、ずいぶん無礼なことをしてしまいました」

「い、いえ無礼だなんて」

他人の家の池に落ちて迷惑をかけている自分の方がよっぽど無礼なのではないだろうか。そう考えて、僕は居心地が悪い思いがした。

「私は王里定代おうさとさだよと申します。この家の主人の妻。今回の茶道教室の講師役であり、主催者でもあります」

どうぞ、よろしくお願いいたします。

と、その女性が頭を下げた。それは不自然さの欠片もない流れるような動作で、見る人の心を掴む、洗練された美しさがあった。

僕はそのお辞儀に思わず見とれてしまう。我に返って返事をしていないことを思い出し、慌てて頭を下げた。

「こ、こちらこそ、よろしくお願いいたします、お、王里先生」

「あらやだ、先生だなんて。もっと普通に呼んでくださいな。私はそんな大層な人間じゃないもの」

「そ、そうですか、では、王里さん」

今度はそう呼ぶと、彼女は満足したように頷いた。少し釣り上がった感じのその目は、まるで僕の心を見透かすような不思議な力があるように見える。

「ふふ、あなたは本当に真面目な方なんですネ」

「真面目、ですか？」

「そうですよ。そして、とても優しい人のようです」

「は、はあ……」

どうやら、この出会ってからの短い期間で、僕はいろいろと観察されていたらしい。茶道を学んでいると、こんな風に人に対して分析的になるのだろうか。

「でも……」

と王里さんがそこで言葉を止める。

「でも、だからこそ、いろいろと苦勞も多いのではないですか？」

その瞬間、彼女の目がくっつと細められた。きっと何かを意図しての言葉なのだろう。僕は聞き返す。

「と、言いますと？」

「ほら、さっきの彼女さん」

「ああ、黒宮先輩のことですね」

「あなた、あの人に池に引っ張りこまれたのでしょうか？」

その言葉に僕は驚いた。渡してもらった服を取り落としそうになる。

「み、み、見てたんですか？」

「いえ、そうではないですけど。大方、そんなことではないかと思ひまして……でも、その様子ですと、やはり正解だったようですね」

「はは、実は、まあ……」

僕は情けない苦笑いを浮かべつつ鼻の頭を掻く。もしかすると、もっと男らしく振舞いなさいとたしなめられるのかもしれない。そう思ったが、彼女からの言葉はそれとは違った。

「世の中にはああいうどうしようもないタイプの人間が、時々います」

急に凜然と響いた声に、僕は聞き返す。

「あ、あの、ああいうタイプの人間って」

「横柄でわがままで、周りのことを何も考えない傍若無人な人間。他人を自分の所有物が如く扱う人たちのことですよ。彼らは自分がこの世の王様で、大抵のことは自分の思い通りになると思っている」

それまでとは一変したあまりに威圧的な口調に僕は唾然として口を開けた。一体、どうしたというのだろう。僕が彼女の目を見ると、その真剣な瞳の奥には深い嫌悪感情があるように感じた。

王里さんは続ける。

「彼らは他人との調和を重んじない、極めて野蠻で頭の古い者たちです。この世にルールがあることをまるで理解していない。いえ、勝手に自分こそがルールだと勘違いしているのです。本当に、程度の低いことと言ったら……何様のつもりなのでしょうね。まあ、これは私個人の見解ですが、そういう人間とは、なるべく関わるべきではないと思いますわ」

彼女の言葉に、ぶるりと背筋が震える。これが水に濡れたことか
らくる寒気ではないことは明らかだった。

この人、なんだか怖い。僕は直感的に思った。

「きっと利口なあなたには理解してもらえと思いますが、それが賢明な判断というものです」

「はあ、そうですね。た、確かにあの人は危険です」

僕は何だか圧倒されながら答えた。

「いつも乱暴だし、無茶苦茶なことを頼んでくるし、態度は冷たいし、タバコは吸うし」

でも……。

そう言葉が続きそうになって、僕はぎょっとした。思わず、口を押さえる。

おい、今僕は何を続けようとしたんだ？ 何を否定しようとしたんだ？

先輩はこの人の言うとおり、ろくな人間じゃないじゃないか。近づけば、何をされるか分からない。いつだってトラブルを持つてくる。

ちっとも良い人、なんかじゃ……。

「どうしました？」

僕の様子を妙に思ったのか、王里さんが訊ねてくる。

「何か仰りたいことでも？」

「い、いえ。何でもありません」

僕はそう言ってごまかした。心の中で何かよく分からないものもややもと漂っている気がしたが、無視をする。

「とにかく、僕、服を着替えますね」

「あら、そうでしたわね。なのにこんなに余計な話をしてしまって、申し訳ありません」

またしてもあの無駄のない綺麗な動きで、王里さんは丁寧に礼をする。

「それでは、後少しで準備が整いますので、それまで先程の部屋でお待ちくださいね」

そして、くると踵を返し、王里さんが一歩二歩廊下を進んだところだった。彼女は急に何かを思い出したように、肩越しにこちらを振り返り、

「ああ、それから……」

と僕を見た。

「何です？」

「おそらく、あのお嬢さん。教室が始まって三十分もしないうちに帰ってしまうと思いますよ」

「え？」

「きっと、そうなりますわ」

そうして、今度はこれまでの優しい笑みが嘘だったかのように、ぞっとするほど冷たく笑いながら、王里さんは僕の視界から消えていった。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。

7

服を着替え、先輩の待つ部屋に戻ってくると同時に、僕らは待合室からまた別の部屋へと案内された。長い廊下を渡った突き当たりがある、長方形に広い和室である。畳の上には人数分の座布団が敷いてあり、どうやらそこに座るようだった。僕と先輩は教室に來た他の女性たちに混じって、その部屋に入る。そして、目立たないよう、部屋の後ろの方に陣取ると、他の人達と同じように正座をして座った。

黒宮先輩は最初、なんとあぐらを掻いて座ろうとしたのだが、あまりにも無作法だと思い、僕が注意すると、しぶしぶ従ってくれた。

「正座は嫌いなのだ。足が痺れる」

「それは僕だって同じです。けれど、こういう場では、なるべく整った姿勢でいないと」

そして、それに加えて、僕がこの場に相応しくない行動をしないよう注意をすると、先輩はむうと口を尖らせ、僕の膝を抓ってきた。

「うるさい。お前が偉そうにするのは、見ていて気分が悪い」

と睨んでくる。

しかし、僕は無視をすることにした。今日は先輩の乱暴な性格を矯正するために来ているのだ。こんなことでいちいちイライラしてもらっては困る。

先輩はもう少し不快な状況を耐えぬく根性が必要なのだ。

僕が黙っていると、先輩もこれ以上怒ることを諦めたのか、ふんと鼻息を飛ばし、前を向いた。とりあえず、もう何も言ってこない

ようだった。

まずは一安心である。

しばらく待っていると、前方の襖がさっと開いた。そこから先ほどの王里さんと共に、何人かの女性が顔を出す。彼女たちは僕たちの前に横一列になって並ぶと、全員が同時にお辞儀をした。

王里さんが口を開いた。どうやらこの場に集まった人々に対して、簡単に自己紹介を始めたようだった。彼女が終わると次の女性、また次の女性という具合に、自己紹介が続いていく。

何でも今回の茶道教室は生徒たちを数グループに分けて指導するらしく、彼女たちはそれぞれのグループの指導者役らしい。

それが終わると、早速、茶室に連れていかれるのかと思いきや、今度は生徒たち一人一人に小さな冊子が配られた。パラパラと捲ってみると、どうやら、日本における茶道の歴史について書いてあるようである。

「織田信長や、豊臣秀吉に仕えた千利休は――」

少々長ったらしい説明だ。

僕は冊子の文章を目で追いながら、前ではきはきと説明を始めた女性の話を聞く。

しばらくしてふと、横を見ると、先輩の様子に目がいった。長い話に聞く気力も無くなったのか、先輩は正座の態勢のまま、体を前後に揺らし、完全に船を漕いでいた。すう、すう、という寝息が聞こえてくる。

僕は慌てて先輩の肩を揺すぶった。

「ちょっと、先輩。起きてください」

「――んあ？」

彼女は寝起きのぼんやりとした瞳で僕を睨んだ。

「何だ広宇須。私の睡眠を妨げるとはどういう了見だ」

「ちゃんと話を聞かないと、せっかく説明してもらってるのに」

「うるさい。そんなものを聞かなくとも、命に別状はあるまい」

そう一喝して、先輩は腕組みをすると、止める間もなく再び眠ってしまった。

僕は大きいため息をつく。今のところ、ちっとも茶道に興味を示している様子はない。こんなことで僕の計画は上手くいくのだろうか。

そう思ってふと、前に視線を戻した時だった。前方に座っている王里さんと目があつた。

「あっ！」

彼女は僕を見た後、隣で僕の肩を枕に眠っている黒宮先輩を見て、にやりと笑った。僕は先程の彼女の言葉を思い出し、そら見たことか、と言われたような気がして、何だか恥ずかしくなった。

説明が終わると、ようやく、本番の待ち受ける茶室に行けるようだった。

前に立っていた女性が参加者たちの名前を読み上げている。今日のグループ分けを発表しているのだろう。

僕と先輩は二人とも王里さんのグループに分けられた。なんとなくそんな予感はしていたが、それが現実のものとなり、背筋がぞくりとした。僕たちが王里さんに目をつけられていることは明らかかなようだ。

僕と先輩の他には二人の女性がいて、話を聞くに、彼女たちも茶道は初体験のようで、ずいぶん緊張をしている様子だった。

しかし、一方で先輩はというと、説明中にしつかり睡眠をとったためか、人目を気にせず、緩みきった大あくびを連発している。僕の必死な思いなど知らずに、暢気なものである。

茶室に入ると、中には先に王里さんが座っていた。四畳半のスペースに、僕たちは王里さんと向かい合って座る。先程の説明では、その座り順にも意味があるそうで、初心者はどこに座ってもいいというわけではないらしい。しかし、今回はほぼ全員が初心者ということもあり、特に指定されることなく、自分が座りたい場所に自由に座ることになった。結果、奥から、僕、先輩、それに続いて、二人の女性という順に並ぶ。

王里さんは、にこにこ僕達を見回した。よろしくお願いしますと挨拶をする。

「初めての方ばかりだと思いますが、緊張せずに楽な気持ちでお茶を楽しんでくださいね」

そして、王里さんはその和服の袖から、白く細い腕をすつと出し、近くに置いてあった茶碗（ここではお茶を飲む容器のことだ）を持ち上げた。それは綺麗な赤い花が描かれた高級そうな茶碗である。彼女は何かを話そうと口を開きかけて、そこでちらりと黒宮先輩を見ると、意味ありげに閉じた。ふふ、と口元だけの薄い微笑を浮かべる。

「これから道具に関する細かい説明をしようと思ったのですが、今回はやめにしましょう……何しろ、長々とした話ばかりでは、眠たくなってきますものね」

思わず、鳥肌が立ってしまいそうなほどの嫌味な口調である。明らかに先程の先輩に対してのものだった。僕は緊張で、額から

冷や汗が垂れるのが分かった。明らかにこの人は、先輩に対して、敵意を抱いている。

「……そうだな」

驚いたのは、その言葉に先輩が返事をしたことである。

「出来れば、余計な御託は抜きにして、さっさと茶を飲ませてもらいたいものだ」

その途端、それまでの和やかな空気が一瞬にして張り詰めたものに変わるのが分かった。僕の目の前で、切られてはいけない何かの糸が断ち切られた気がする。

先輩は売られた喧嘩を買ってしまったのだ。

まずい、これは非常にまずい。

間違はなく、何か『問題が起こるパターン』だ。

僕は身構える。まさかとは思うが、取っ組み合いの喧嘩が起こらないとも限らない。

しかし、僕の心配をよそに王里さんは穏やかな声のままで、分かりました、と答えると、茶碗を膝下に用意した。慣れた手つきで、茶入れからお茶の粉を道具で茶碗に入ると、柄杓でお湯を入れ、茶筌で手早くかき混ぜ始める。ちゃせん

僕は先輩のことが気になりながらも、その彼女の動きから目が離せなかった。

それは単に、彼女の無駄がない、流れるような作業に見とれていたからだけではない。驚くべきことに、彼女はその一連の作業を眼を閉じて行っているのだ。まるで空間に結ばれた見えない糸に引かれてるように見えるほど、彼女の動きは寸分の狂いもなかった。

これは、道具の位置を頭の中で正確に把握していないと出来ない動きである。

先輩を除き、他の参加者の二人も王里さんの動作に息を呑んでいる様子だった。その迷いのない完成された動きは彼女が超能力者であるようにも見えた。

しかし、僕はすぐに分かった。

何ということはない、彼女はただ、どこまでも忠実に、『ルールを守っている』だけなのである。決められた道筋の上をたどっているに過ぎないのだ。いつもと変わらない位置、いつもと変わらない回数、いつもと変わらない秒数、それらを一つ一つ彼女は確認しつつ実行していく。その積み重ねこそが、この目を閉じた動きの秘密である。

そして、それこそが、彼女の長所であり、ポリシーであり、いつだって掟破りな黒宮先輩と相反するところなのだ。

僕がそんなことを考えているうちに、抹茶は出来上がったようだった。器の中から香ばしい匂いが立ち上り、僕の鼻腔を満たした。

僕は王里さんから差し出された湯気が立つ茶碗を持つ。先程の説明があつたとおりに、作法に注意しながら、一口、飲んだ。

すると、なぜか味がしない。この異常な事態に緊張で、舌がきちんと反応していないのだろう。

「おいしいですか？」

と訊かれたので、

「え、ええ……はい」

ととりあえず答える。

そして、僕は器を目の前に戻すと、すぐ隣の先輩におそるおそる

差し出す。

どんな反応を示すのかと見ていたが、次の一瞬、先輩の眼が光ったと思うと、いきなり彼女は片膝立ちの姿勢になった。そのまま彼女は差し出された茶碗を掴み、作法などお構いなしに、ぐっと口をつけ一気に飲み干してしまった。

呆気にとられているのは、僕だけではない。先輩の隣にいる女性たち二人も驚きのあまりあんぐりと口を開けている。それを微動だにせず、じっと見ているのは目の前の王里さんだけだ。

「ああ、まずい!!」

と、勢い良く黒宮先輩は茶碗を置くと、

「これなら、私のほうが上手く作れるな!」

そう叫んだ。

「あら、初心者のおなたにそんな自信がお有りで?」

「もちろんだ。私は世界一完璧な美女だからな!」

いつもの先輩の台詞が狭い茶室を揺すぶるように響く。そして、彼女はざばりと王里さんを指差すと、

「お前、私と勝負しろ!」

と、言い放った。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。

8

先輩が作戦会議にと選んだ部屋は、屋敷の北側にあるあまり陽の当たらないひっそりとした小部屋だった。周囲をぴたりと襖で閉じてしまうと、外からの光はほとんど入ってこない。薄ぼんやりとした室内に先輩のタバコの明かりだけが、ぼうつと妖しく浮かんでいた。

周囲はもやもやとした紫煙が立ち込め、少々息苦しい気がする。しかし、息苦しく感じるのはそれだけではないことを、僕は知っていた。何より、これから行われる勝負が僕は不安なのだ。

先ほど、あの王里さんに大げさに啖呵を切って、宣戦布告をしてしまった後、先輩が提案した勝負というのは、ごく簡単なものだった。それは、王里さんと黒宮先輩がそれぞれ一度ずつお茶を立て、それを僕を含めた他の三名に飲んでもらい、どちらがおいしいかという判定で雌雄を決しようというのである。

周囲がしんと静まり返る中、先輩は揺るぎない視線を、真っ直ぐ相手に向けていた。一方で僕はと言うと、まるで獲物を前にに牙を剥く虎のような先輩の迫力に何も言えず、座ったままだった。

果たして、どうなることかと固唾を飲んでいたわけだが、王里さんはそこまでの展開を最初から予測していたかのように泰然とした態度で、二つ返事で了解した。

『いいでしょう、受けて立ちます』

と侍のような潔さで答えた。

そして、僕があたふたとしている間に、勝手に細かいルールが決まってしまう、気がついた時には、30分後にその勝負が行われることになっていた。

もはや、当初の茶道教室はどこへ行ってしまったのか、その面影

は遠い過去の夢。今や、伝統的な穏やかな情緒とは程遠い、ギスギスとした緊迫感だけが僕らの周囲を押し包んでいた。

全く、僕の計画は丸つぶれである。何があわよくば先輩を茶道教室に通わせるだ。何が性格を矯正するだ。ああ、馬鹿らしい。僕のバカバカ。やっぱり、そんなことなど、最初から不可能だったのだ。しかも、無駄足だけで終わるならまだしも、こんなに厄介な事態まで引き起こしてしまって……あーあ、やはり、余計なことはすべきではなかった。

そんな僕の心境を知ってか知らずか、暗闇の中でさっきから先輩は一言もしゃべらない。これから行われる勝負で、どのような作戦に出るか、画策しているのか、それとも、自らの浅はかな行動に後悔をしているのか（いや、それはありえないか）。いずれにせよ、その表情は闇の中に埋もれて見えなかった。

いい加減、沈黙にも耐えられなくなって、僕が口を開いた。

「それで、どうするつもりですか？」

じり、と先輩との間を詰める。

「あれだけ自信満々だったんですから、当然、勝算はあるんでしょうね」

すると、先輩はすぐに返事はせず、タバコの煙を吐き出して、ゆっくりこう言った。

「当たり前だ。私を誰だと思っている。我が愚かなる後輩よ」

「世界一完璧な美女、ですか？」

僕が言うと、その言葉が僕から出ると思わなかったのか、先輩は

一瞬沈黙する。驚いているようだった。そして、ハハハ、と不敵な笑い方をする。

「ようやくお前も分かってきたようだな。いいぞ、安心した」

急に頭をくしゃくしゃと撫でられる。しかし、全然嬉しい気はしなかった。物事は先輩が上機嫌になればなるほど、万事、悪化の一途を辿るのだ。それはもはや、この世の真理と言っても過言ではない。

僕は先輩の手を払いのけて、さらに詰め寄った。

「出来れば、具体的な話を聞かせて欲しいんですが……」
「何だ？」

「ですから、どうやって、お茶を立てたこともない先輩が、あの熟練者である王里さんよりおいしいお茶を作るんですか？」

少なくとも、僕には一つだって思いつきやしない。

先ほど飲んだ王里さんのお茶に味を感じることは出来なかったわけだが、あの完成された動きで作られた抹茶がまずいなどということがあるわけがない。方や、こちらはお茶を立てる手順だってまとも把握していない初心者先輩だ。そこに天と地ほどの差が生じたとしてもそれは想像に難くない。

先輩が何を考えているのか分からないが、生半可な作戦で打ち勝てるほど、世の中は優しくないのだ。

しかし、先輩は無言のままいきなり、僕の額にデコピンをしてきた。

「痛っ！」

「ふん、だからお前は愚かな後輩なのだ」

先輩は完全に僕を上から見下ろす格好で腕組みをしている。

「いいか、私だって、最初からあの女を超える力を持っているとは思ってはいない。茶の立て方は先ほど大体把握したから問題ないが、所詮、まだその程度の技術だ。それでは、あの女に勝るレベルにはない」

「だ、だったら……」

どうやって、勝つつもりなのだ。

すると、そこで先輩はピンと人差し指を立てる。

「発想の逆転だ。広宇須」

「へ？」

「だから、勝負で私のお茶をおいしくするのではなく、彼奴のお茶をとびきりまずく細工すればいいのだ」

「……」

なるほど、と僕は目を丸くする。

確かにそれは盲点だった。それならば、まだ可能性はあるかもしれない。

「そ、それで、どうやって王里さんのお茶に細工をするんですか？」

僕は勢い込んで聞いた。これは今までにない展開だ。初めて先輩をすごいと尊敬しそうになる。さてはとんでもない妙案を持っているのだろうか。

しかし、

「うん？」

先輩の反応は鈍い。

「いえ、だから、どうやって、王里さんの……」

「ああ？」

「その、だから……」

僕は敏感に感じ取る。先輩の表情がわずかに曇った。

まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか、まさか……。

「考えてないのか……よ」

「当たり前だ!!」

「すごい勢いで開き直った!!」

僕はがつくりと膝をついて頭を抱え込む。

せっかく少しは見直したというのに。いつもと違い、後先を考えずに、厄介ごとを起こさなくなったのかと思っていたのに。

「どうする、つまり、なんですか？」

おずおずと僕が聞くと、先輩の手が、ぽん、と僕の肩を叩いた。

「広宇須、お前が考えろ」

だと思ったよ。

非常に遺憾なことに、残された時間は少なかった。僕は狭い廊下

を行ったり来たりしながら、頭をひねっている。

どうにかして、先輩を勝たせる方法、勝たせる方法……。

そう念じるように思考を重ねて、どれくらいが経っただろう。未だ、なんの妙案も見つからないまま、時計の針だけが無情にも、刻々と進んでいく。

僕は大きなため息をついた。

必死になればなるほど、考えは非現実的なものばかりが膨らみ、これだと踏み切れるものには一向に辿りつかなかった。暗闇の中でジグソーパズルを完成させようとしているような、そんな不毛さすら感じてしまう。

そもそも、この思考の先に明快な答えは待っているのだろうか。王里さんの抹茶だけに巧妙に細工をし、一方的に不味くさせる方法など。

考えれば考えるほど、その出発点の考えこそが現実的なものではなくなっていくような気がした。

僕はそこで、もうずいぶん前に、後は任せたと行って、部屋を出ていってしまった先輩の事を思った。今頃、彼女は先程の部屋に戻って、いかにも準備は万全だと言う顔をして王里さんたちの前に座っていることだろう。ふてぶてしいほどに横柄な態度で。まるで、自分がこの世の王であるかのような態度で。

そんな彼女に、今さらながら、怒りが湧いてきた。僕は、どうして彼女のために、こんなに悩んでいるのだろう。必死になっているのだろう。

何だか、もう全てが馬鹿馬鹿しい。このまま何も言わずに、帰ってしまおうかしら。そうすればいっせいで済むかもしれない。

第一、この勝負で彼女を勝たせることに、何の意味があるのか。僕は考えた。それは先輩を更生させようという僕の当初の予定とはまるで違う。下手をすれば、彼女に控えめな性格を目覚めさせるどころか、横暴な一面をますます増長させることになるかもしれない。

もし、これで彼女がまたしても今までの調子を取り戻し、僕の身に危険が迫れば、本末転倒だ。何のためにここに来たのか。僕の行動は全て最初からやぶ蛇にだったということになってしまいかねない。

王里さんの言葉が蘇る。

『他人との調和を重んじない、極めて野蛮で頭の古い者たち』

確かに、そうだ。あんな先輩は、一度痛い目を見てもらわなければ困る。僕がいなくなったことで右往左往してみればいい。そして勝負に負けて、王里さんに謝るのだ。さらに、それによってこれまでの行いを反省し、僕に土下座をするべきなのだ。一回くらいじゃとても足りない。百回くらいすべきだろう。

そうだ。そうに違いない。

結論は出た。

僕は先輩を助けない。以上、終了。

僕は狭い廊下でくると踵を返し、屋敷の玄関の方へ向かおうと歩いた。茶道教室なんてもはやどうでもいい。せっかくの休日なのだ、もっと有意義な過ごし方をするべきである。

そう思いながら、ずんずんと廊下を進む。

しかし、ふいに、そんな僕の足が止まった。

——でも。

でも、でも、でも。どうしてだろう。

僕は、先輩のことを放っておけなかった。

それは単に僕がお人好しなのかもしれないが、それとはまた違うものが僕の中にある、それが僕の事を引っ張って離さない。先輩の傍にいたい。そう思う僕が僕の中に確かにいるのだ。

思えば、それもそうである。

先輩のことが本当に怖いなら、本当に嫌いなら、これまでいつだって逃げ出すチャンスはあったはずだ。何も律儀に毎日毎日部室に顔を出す必要はない。

けれども、僕は、これまで一度だって、そんな選択を取らなかった。取ろうとも思わなかった。

それは何故か。

「うーん……」

これは、出来れば認めたくはないけれど、どうやら、僕という人間は心の根っこの部分で、あの先輩のことを好いているらしい。

DMか、と突っ込みを入れたくなるが、それとはまた違う気がした。

何だかよく分からないけれど、とにかく僕は先輩を助けたいと思っている。理由はそれだけで十分だろう。

しょうがねえな。僕は両手で自分の頬を叩く。気合を入れたつもりだった。

助けてやるか。

でも、期待すんなよと思う。

僕はスーパーマンでもないし、名探偵でもない。こういう時に、誰もがあつと驚く機転を利かせられるような、そんな気の利いた人間じゃない。

単なる、しがない、脇役なのだ。

脇役に出来ることは限られる。9回裏からの奇跡の大逆転なんてのは、おそらく、無理だ。せいぜいヒット一本が限界だ。

しかし、やらなければ、先輩は負ける。

ともかく今は、この勝負で先輩を勝たせることを考えなければ……。

何だって、いい。少しの光明でも見いだせば……。

そうして目を閉じた時だった。

何かの匂いがした。

出来れば、嗅ぎたくないような、どぶの匂いだ。周囲に目を走らすと、僕は自分が見覚えのある場所まで歩いてきていたことに気がついた。

先ほど池に落ちた僕が服を着替えた部屋である。どうやら、畳んでおいた衣服についていた匂いが、こうして廊下にまで臭ってきているらしい。

これは帰って早く洗濯しなければならないな、と思う反面、何かに気がついた。

もしかしてこれは、何かに使えないだろうか。

そう思ったとき、屋敷のどこかにある柱時計がぼおんぼおんと鳴った。

決戦の時が来た。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 9

「すみません、遅れてしまつて」

襖を開けながら、僕が部屋に滑り込むと、すでに全員の姿がその茶室にはあった。黒宮先輩に王里さん、それから、たまたまこの場に居合わせた不幸な二人の女性。茶室の床の間の前の僕の場所だけが空いている。僕は一礼して、すぐに用意されている座布団の上に座ったが、不思議なことに誰も僕のことを咎めることも訝しげな視線を向けてくる者もいなかった。皆、ちらともこちらを見ず、顔を正面に向けている。

おかしい、と思つたが、僕にもすぐにその理由が分かつた。

この狭い空間に張り詰めている異常な緊張が、見えない糸で全員を縛り、まともに身動きがとれなくなっているのである。正座した途端、喉元から込み上げてくる圧迫感に、きゅうと空気が詰まった音がした。

襖を閉めきつてしまったことで、如何にもこの茶室だけが平和で穏やかな世界から切り離され、不穏で危険な異空間にさまよい込んだような印象を与える。僕の座る畳の下には、今や巨大な重力を持った無限の暗闇が広がり、ミシミシと音を立てながらこの茶室を押し潰そうとしているのだ。

僕は、思うように動かない視線を畳の上で徐々に這わせながら前進させ、やつのことで黒宮先輩の表情を確認した。そして、準備は整ったという意味を込めて小さく頷いたのだが、なぜか先輩に反応はなかった。

ただ、そこに初めから置かれている人形のように先輩は佇んでいる。いつにもなく静かな様子だった。まるで、一人ぼっちで置き去りにされた子供のような悲しみと不安が入り交じった眼差しをして

いる。

そんな先輩は儚げで、朝つゆに濡れた花のような可憐さがあった。思わず、その透き通るような白い肌に触れたくなる。

僕はそんな先輩を以前に一度だけ見たことがあるな、と思った。それはつい最近のことである。僕を学校の屋上から突き落とし、周囲から怒声を浴びせられた時の事だ。珍しく意気消沈した先輩の後ろ姿が思い浮かんだ。

僕ははっとする。苦しんでいる先輩を助けなくては、と思う。

すると、一瞬後、まるで歯ざしりするように顔をしかめた先輩は、ふいに僕の方へ目を向けてきた。そして、目と目があつた刹那、彼女の口元が僅かに笑った、ように見えた。何かの見間違いだろうか。僕が確かめられずにいると、先輩はいつも通りのあの強気な表情に戻っていた。

その顔色に不安や恐怖の影はない。

どう見ても、その時点で自身の勝利を確信しているようにしか見えなかった。僅かに前髪が揺れ、その隙間から鋭い眼光がちらちらと覗いている。

そんなにまで僕の立てた作戦を信用しているのだろうか。それはそれで嬉しい気もしたが、買い被られても、僕の力には限界があることを忘れないで欲しいものである。

なにしろ、僕の作戦が百発百中であるかどうかは、本当に分からないのだ。

しかし、それにしても今の表情の変化は何を意味するのだろう。僕はその理由を考えたが、少しも経たないうちに、先輩が動いたので、思考はそこで止まってしまった。

先輩はその手に柄杓を持ち、既にお湯を茶碗に汲み始めている。一言も言葉を交わさない内から、どうやら勝負は始まっているようだ。

すると、先輩が茶筌を持ち、お茶を立て始める。

先ほど、一度だけ王里さんがお茶を立てたのを見ただけで、見よ

う見まねなのは間違いないのに、先輩の動作には迷いがなかった。常人には理解出来ない根拠不明な確信を抱いて先輩がお茶を立てているのが分かる。それは王里さんの時とは違う驚きだった。しばらくして、

「出来た」

とぶっきらぼうに先輩が言った。

僕は先輩の動きに見とれていただけに、自分の方へ茶碗が差し出されたのにすぐに気がつかなかった。二三秒遅れて我に返り、すぐに茶碗を持って、一口飲む。

感想は、少々破壊的な味がした、とだけ言っておこうか。

まあ、抹茶など僕にとっては何となく苦いだけの飲み物なので、微妙な味の違いなど見分けようがないのかもしれないが、先輩の立てたお茶は僕には少々荒っぽいような気がしたのである。おそらく手順などはさほど間違っていないのだろうが、細かいことへ気配りが出来ていないために、雑な部分が見え隠れしている。しかし、その中にも先輩の強さというものが秘めやかに宿っているような、そんな味だった。

総じて、なんつーか、よく分からないのだけれど。

僕に続いて他の女性も一口ずつ飲んだ。果たしてどういう感想を抱いたのか、緊張したその横顔からは読み取れなかったが、特に不快な顔を作らなかつたところから、可もなく不可もなくといったところだろうか。

さらに王里さんが、先輩のお茶を、飲む。

一口飲んで、大きく息を吐いた。ちらともその表情は揺るがない。

「おいしく頂きました」

いかにもなおざりな言葉だった。きっとその感想には何の意味も

ないことだろう。しかし、言葉からは見えない、彼女から溢れ出す
並々ならぬオーラは、先輩を完膚なきまでにたたきつぶそうという
殺気のようなものを放っているように見えた。

「次は私の番ですね」

そして、彼女はす、と立ち上がると、先輩と位置を交代した。す
れ違う一瞬、その空間にバチリ、と火花が飛び散ったように見えた。
僕は思わずごくりと生唾を飲み込む。

この女性と女性の生き様同士の戦いに、僕は今、介入しようとし
ているのか、と思うと背筋がぶるっと震えた。

しかし、やらなくては。

僕は手の中に隠し持ったものを握りしめた。

上手くいくか分からないか、一か八かだ。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。 10

王里さんの立てたお茶に細工すると考えたとき、僕がまず考えたのは、味を変えることだった。それが一番手っ取り早いし、それ以外の事になど視線を向けるという意識すらなかった。何よりも先輩の口から発せられた、不味くする、という発想が頭の中にあっただから、視点がそこだけに限られてしまったのは、当然の流れと言っているだろう。

いやいや、最初からもっと広い視野を持てよ、柔軟性という言葉を知らないのか、という意見もおそらくあるだろうが、今は待つて欲しい。

ともかく僕は、単純に、抹茶は苦いものであるから、それをまるきり見当違いな変えてしまおうではないか、と考えたのである。飛び上がるほどの酸味を加えてもいいし、とびきり辛くしてやってもいい。

しかし、そう考えたとき、一番の難題は、どのタイミングでそれを実行するか、という事だった。

順序からみて、幸運なことに、一番奥に座る僕は王里さんからが立てたお茶を一番最初に受け取ることの出来る位置にいる。つまり、僕はそのお茶の器に一番最初に触ることができ、何らかの細工を出来るチャンスはあるわけだ。

しかし、いくらそのチャンスがあるからと言って、既にこの勝負を支配した、と思うのは時期尚早である。

何しろ、僕が茶碗に触るその間は、全員が目が僕の一举手一投足に向けられているわけで、その視線を掻い潜り、何らかの刺激物をお茶の中に混入させることが出来るか、と考えれば、不可能に近い、と思ったのである。

特に、あの鋭い眼光を持った王里さんがいる。他の人間たちはごまかせても、彼女だけは無理だろうという確信が僕の中にはあった。

僕がもしも、大観客の前であつと驚くマジックを披露するようなマジシャンのような技術を持っているのなら、まだ可能かもしれないが、ご覧のとおり、僕はただの高校生である。特別手先が器用なわけではないのだ。

きつと王里さんなら、僕の手の動きに妙な物を感じれば、その場で勝負を取りやめにするかもしれない。

事が発覚した時、僕の立場がどうなるのか、想像したくもなかった。

では、どうする。じゃあ、どうする。

代わりの案はあるのか!?

あの時、僕の頭はパンク寸前のタイヤだった。パンパンに張り詰めた空気が外へ出よう出ようと押してくるのである。

しかし、そんなドン詰まりの僕はとある部屋の前で立ち止まった。濡れた、服の匂い――。

それは、つい、鼻をつまみたくなるような、泥の匂いである。

その瞬間、僕は思いついた。

そうだ、これがあつた。

何も最初から味だけにこだわる必要はない。匂いだって、飲み物の印象を変えるには十分に違いない。

柔軟性を持って、と思った多くの方々、お待ちどう様である。

僕は考えた。

例えば、今日の前に料理があるとする。その料理は彩り豊かで、栄養バランスも取れ、高級食材をふんだんに使った絶品の料理である。

しかし、その料理から、もしも生ゴミの臭いがしていたらどうだろう。きつと、誰もがその料理に箸をつけようとは思わないに違いない。腐っているのか、あるいは、雑巾の切れ端でも混ざっているのかと考えるかもしれない。

うん、そうだ。僕は確信する。

そう、匂いならば……。

この勝負に勝てる。

そして何より、匂いだけならば、ただ茶碗に触れるだけでいい。
何も茶碗の中に危険を冒して刺激物を入れなくとも、器の底にでも泥の匂いを摺り込むだけでいいのだ。至極簡単である。

これで、最大の難題もクリアだ。

そう思っ僕はぐっと拳を握る。

この作戦でいけば、一気に先輩の勝利は近いたも同然だ。

——そして、今、僕の手の中には池の泥水を染みこませた布があった。

僕はそっと額に流れた汗を拭う。できるだけ平静を装い、浅く呼吸をして、気を落ち着けていた。

王里さんは先ほどから無言でお茶を立てている。何かに勘づいている様子はない。

大丈夫、大丈夫だ。

僕はただ、これを、器に塗ればいいのだ。何も難しいことではない。僕にだって出来る。誰にだって出来る。

僕は万美嬢のことを思い浮かべた。あのたんぽぽのような柔らかな微笑みを思い出す。

ああ、幸せだなあ、心が豊かになるなあ。

よし、これだけ人間的な余裕があるのだから、失敗するはずがない。間違いない！僕は無理やりそう思い込む。

と、そこで王里さんの手の動きが止まった。どうやら、お茶を立て終わったようである。相変わらず、目は閉じたままだ。全く、大

した技である。

すす、と音もなく、茶碗が僕の方へ差し出される。

僕は腹をくくった。もう後戻りは出来ない。

ついに、作戦決行の時だ。

僕は緊張を読み取られぬように深呼吸をする。そして、王里さんの差し出された器に、手を触れようという瞬間だった。

「お待ちください」

王里さんの冷静な声が響いた。僕は驚いて手を引っ込める。

嘘だろ、と思った。

まさか、彼女は僕が器に細工をしようとしていることに気がついたのだろうか。ありえない、と思いつつも、彼女ならありうるかもしれない、と思ってしまう。

僕はじとりと背筋に嫌な汗が垂れるのを感じた。

「……何か？」

声が震えないように気をつけながら、恐る恐る聞く。
すると、

「今考えたのですが、今度は飲む順番を逆に変えませんか」

彼女はそう言った。

「え？」

「だって、いつもあなたからでは、最後に飲む方は一番冷めたお茶を飲むことになってしまいますわ。それでは少々不公平ではありません？」

「は、はあ……」

「せっかくの茶道教室なのですから、たまには下座の方にも、一番最初のお茶をお飲みになってもらいたいのですよ。ですから、ほら……」

「ど、どうしても、ですか？」

上手くいくとは思わないが、一応食い下がってみる。すると、案の定、彼女はこう聞いてきた。

「あら、何か順番が変わることで不都合なことがあるのかしら？」

僕に向けられた王里さんの瞳は明らかに疑いの色を帯びている。もちろん、僕はその提案に正当に反論出来る余地はない。

「い、いえ、何も……」

と、言葉を濁すしかなかった。

「では、よろしいですね」

そう言って、王里さんは僕の手に触れる前に茶碗を奪い取るように持ち上げると、奥に座っていた女性の前に差し出した。

その瞬間、僕は視界が全て白黒に染まってしまうように見えた。

ああ、終わった。もはや、手遅れである。

作戦は完全に失敗だ。

僕は愕然とする。

この作戦は、僕が一番最初に器に触るからこそ可能なのであり、そうでなければ、最初から成り立たないのだ。

食いしばった歯の間から、絶望のため息が漏れ出る。

僕は思わず、隣に座る先輩の顔を見た。今の僕の様子を見れば、その目論見が外れたことは、間違いなく分かることだろう。

きつと、がっかりした顔をしているに違いない。

しかし、その顔はまだ闘志に燃えている精悍なものだった。未だに僕のことを信頼しているのか、ちらともこちらを見ず、じっと前だけを見据えている。

この状況で、まだ自身の勝利を確信しているのだろうか。

僕は信じられない心持ちだった。そして、この後の展開を予想して、げんなりとする。勝負に負けた先輩は王里さんからどのような仕打ちを受けるのだろう。余程嫌われている様子だったから、何をされるか、分かったものではない。

僕は、絶望した心持ちで、女性が茶碗を持ち上げるのを見る。

ああ、終わる。

終わる、終わる……。

そして、女性が口をつけて、一口飲んだ。

そう思った時だった。

「ぶふうふうふう!!」

女性がいきなりお茶を吹き出し、緑色の飛沫が宙を飛んで、王里さんの顔面に思い切り飛び散った。

第一章 学校生活に波乱はつきものだ。

11

「そ、それで？」

興味津々な様子で頬を紅潮させた万美嬢が僕にその話の続きを促した。

「その時、何が起こったんです？」

僕は座り慣れたベンチに腰掛けていた。

そこは、いつもの公園である。

学校帰りにふらりと立ち寄れる場所であり、僕と万美嬢が時折、跳治先輩がやってくるのを待つ間、他愛もない話をする場所でもある。

街中の喧騒から離れた静かな住宅地の一角にあるその公園は、しん、として人気もなく、夕暮れの中、まるで細い明かりに照らされた舞台のようにも見えた。空には夕闇の星が瞬き、どこからか、甘い春の香りが風に乗ってやってきていた。

万美嬢が僕の服の袖をぎゅっと引っ張ってくる。

「そのお茶がそんなに美味しくなかったのですか？」

僕は彼女の接近とその仕草に少し動揺しながらも、

「い、いや、違いますよ」

と首を振る。

僕が暇つぶしに、と始めた話は今やクライマックス。黒宮先輩が王里さんと対決し、その結末や如何に、という場面だった。

王里さんの立てたお茶が、僕ではなく、予想外にも一番下座に座っていた女性に渡されたわけであるが、そこで、その女性はお茶を一口飲むと同時に、お茶を吹き出してしまったのだ。

それが、なぜなのか。

もちろん、僕は答えを知っている。

いいですか、と僕は仰々しく咳払いをした後、口を開いた。

「……実はそのお茶が、とても辛かったのです」
「辛かった？」

その答えに、万美嬢は目を丸くする。

「そんな……」

「驚くのも無理はありませんが、あの抹茶の中には一瓶まるごとの唐辛子の粉が入っていたんですよ」

「と、唐辛子が、一瓶……」

彼女は信じられない面持ちで、僕の言葉をなぞる。

「どうして、です？」

「先輩が入れておいたんです。お茶の粉と一緒にして」

僕は先輩が誇らしげに語っていた事を思い出しながら答える。同時に、以前、苦勞して手に入れたパンに先輩がやたら唐辛子を振りかけていたことが頭をよぎった。いかにも不健康そうだが、先輩はそういった刺激をこよなく愛する人なのだ。

「確か、先輩がお茶を立て終わり、立ち上がる前、全員の目を盗んで、ドバッと入れたらしいですよ」

ドバッと、という表現が声に出すと何だか面白く僕は自分で言っ
て笑ってしまった。しかし、万美嬢は笑っていない、まだ疑問があるのだ。

「でも、でもそれでどうして気がつかないなんてことがあります？
だって、その王里先生はそのお茶の粉を使ったんですよ。だったら、唐辛子が混じっていることくらい……」

しかし、言いかけて、そこで自分で答えに行き着いたのか、彼女は「あ！」と口を押さえる。

僕は、それを察して頷く。

「そうです。なぜ、王里さんはそのことに気がつかなかったのか。それは、『眼を閉じていた』からです。王里さんは、お茶を立てる時の手順を全て覚えて、把握していた。目を開ける必要がないほどに、ね。だから気がつかなかったんですよ。お茶の粉の中に、唐辛子の赤い粉が入っていたなんて」

つまり、先輩は最初からそれを見込んで、その作戦を実行するつもりだったんです。

僕がそう説明すると、万美嬢は全て納得したようで、そこで僕の服の袖から手を離れた。それまで彼女の肌の接近にドキドキしていただけに、僕はその動作にほっとする気持ちと、ガッカリする気持ちが一瞬ひしめき合った。

万美嬢は大きく感心のため息を漏らす。

「これは驚きです。その黒宮先輩はまるで、名探偵のようなひらめきで作戦を立てたのですね」

「そうですね、彼女には珍しいことに」

僕が皮肉を言うと、

「ですね、珍しいことに」

と彼女が意を察してそう返す。

一瞬、目と目があって、ふふ、と笑いあう。心が通じ合ったような気持ちになって、僕は嬉しくなった。

「それで、その後はどうなったんです？」

「ああ、そこはまだ話してなかったですね……」

僕は夜空を見上げながら、続きを語り始めた。

その後、僕と先輩がどうしたのか、というと、何も大げさに言うつもりはない。

ただ、あの場から、こそ泥の如く、すたこらと逃げたのである。

あの直後、いきなりお茶を噴きかけられた王里さんはあまりのことに呆気にとられていた。まるで目の前でいきなり風船が破裂してしまった子供のように、目をパチパチと開け閉めしながら、口をあんぐりと開けていたのを覚えている。頬に飛び散ったお茶の水滴を拭うこともせず、ただ体を硬直させて微動だにしていなかった。

しかし、それも無理はないだろう。

何しろ、あの時は僕も彼女の同じ気持ちで啞然としてたのだ。

なぜ、どうして、こんな展開になっている？

あの女性は思い出し笑いでもしたのだろうか？ それとも、お茶に虫か何かが偶然混入していたのか？

次から次へと混乱がやってきて、膨らんでは弾け、膨らんでは弾けた。

挙句、もしくは、やはり何も入っておらず、お茶を飲んだ女性は先輩とグルだったのか、とそんな突飛な想像すらした。

もはや、目の前の景色がぐるぐると回転を始め、そのまま気絶してしまいかねない状況である。

しかし、そんな僕をぐっと現実につなぎとめてくれたのは、先輩だった。急に誰かに手を引っ張られたと思い、夢うつつの気持ちで振り向くと、先輩が僕の手を握っていた。

にやにやとした意地悪い笑みを浮かべた先輩は僕と目が合うと、

「よし、作戦成功だ。逃げるぞ」

と立ち上がったのである。

まだ状況が掴めていない僕には何の説明もないままに、強引に手を引っ張り、

「ひいい、辛い、辛いいい！！」

と、悶絶してのたうち回る女性を飛び越えて、茶室の入り口の襖を開け放った。

そして、そこで振り返ったと思うと、ようやく自分を取り戻し、烈火の怒りを顔に滲ませ始めている王里さんに、

「私と勝負して勝てると思っていたのか、ハッハッハ」

と捨て台詞を吐き、脱兎の如くかけ出した。僕はふらふらとした心地で、半分引きずられるようにして、先輩に付いていった。直角に規則的に伸びた板張りの座敷の廊下を走り、玄関を先輩は目指した。

僕は奥の部屋から王里さんの手が伸びてくるのではないかと、後ろを振り返れないほど恐怖していたが、

「広宇須、走れ！」

という先輩の叱咤の声に急かされるように必死で足を動かした。そうして、どのくらい、走ったのか分からない。

気がついた時には、僕は先輩と共に、屋敷の外、ここへ来る途中で降りたバス停の前まで走っていた。

はあはあ、とすっかり空っぽになってしまった肺に空気を取り込みつつ、僕は先輩に説明を要求した。

「い、一体、何が起こったんですか？」

しかし、先輩は僕の言葉には答えるつもりがないのか、そもそもどうでもいいのか、

「見たか広宇須、あの女の顔、傑作だったな」

と、豪快に笑っただけだった。

僕は驚くやら呆れるやらで、その場にへたりこんでしまった。すると、急に背筋が寒くなり、立ち上がれなくなる。

今さらながら、とんでもないことをしてしまったのだと、腰が抜けてしまったのだ。

すると、そんな僕を先輩がまた笑う。

もう、勝手にしてくれ、と僕はコンクリートの地面に寝転がった。

「でも、僕はやっぱり、信用されてなかったのかな」

ぼつり、と思い出すように、僕は言葉を発していた。体を揺らしながらゆっくり首をそらすと、ぎしり、とベンチが軋む。

「え？」

万美嬢が微笑んだままの顔でこちらを向いた。

「どうしたの、です？」

「だって、要するにこれって、僕の作戦なんて必要なかったってことじゃないですか。僕に頼らなくても、先輩は先輩で勝手に勝負に勝ったんです。僕は、いてもいなくても良かった！」

つい、発する言葉の端に力がこもってしまう。こんなことを言うつもりではなかったのに、なぜか、自分に対する情けなさ先輩に對する怒りがいつの間にか湧いてきて、声になっていた。

一体、僕は何だったのだ、と思うのだ。

先輩のためを思って、思考を重ねた作戦だったのに、結局、役に立てず、先輩が勝手にやってしまった。

役に立てなかったのは、僕の力不足だったとしても、それ以前の問題として、僕は最初から先輩に戦力として見られていなかったのではないか、という強い疑問が残る。

こんなことを万美嬢に話しても意味がないと分かりながらも、僕

はついつい口が滑ってしまっていた。

これまでの先輩に対する不満が、まるで堰を切ったように溢れ出す。

僕はいつだって先輩に振り回されてばかりで、流されるままで…
…まるきり、ただの操り人形じゃないか。

結局、僕なんて、いなくても、いいんだろ。

しかし、そこで万美嬢の鈴の音のような澄んだ声がりと響く。

「いえ、違うと思いますよ」

「え？」

「その黒宮さんと言う方、絶対に広宇須さんのこと、信頼してます」

大きく開かれた彼女の瞳が僕を捉えていた。そこから溢れる自信に満ちた光に、僕はたじろぐ。

「そ、それは、何か理由があるんですか？」

「理由、です？」

「ええ」

「ありません。ただの勘です」

絶対に、と言っておいて？

僕は拍子抜けする。

すると、万美嬢はいたずらっぽく微笑んだ。

「けれど、きっと黒宮さんは広宇須さんのこと、好きですよ」

「え？」

「でなければ、きっと、すぐに捨てられています」

「……」

「きっと、その黒宮さんはそういう方ですよ」

その言葉に、僕ははっとする思いだった。
なるほど。

捨てられてます、か。

案外、彼女の言うとおりかもしれない。

僕が、先輩から逃げ出せるチャンスをいつでも持っているのと同じように、先輩だって、僕が気に入らなければいつでも放り捨てる
ことが出来たわけなのだから。

そう考えてみると、僕は少しは、先輩に好かれている、ということかな。

僕の心に、少しずつ暖かな陽射しが舞い込む。

でも、単に、利用されているだけなのかもしれないけれど。

ふいに湧いたその不安を、僕は万美嬢の笑顔で打ち消すことにする。こんな美少女の言う事が間違っているはずがないじゃないか。
そうだ、そうに違いない。

そうして、心の中で頷いた時、公園の向こう側に、ギターを抱えた
跳治先輩がのっそりと姿を表した。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 1

脇役にはあってはならないことがある。

それは、主役っぽい展開に巻き込まれることだ。

例えば、空から美少女が降ってきたり、飛行機の墜落事故でたった一人だけ生き残ったり、絶望的な状況で敵に周囲を囲まれたり、ある日突然、不思議な力が使えるようになったり、などが挙げられる。

なるほど、映画や小説でよくあるパターンだな、と思う人もいるだろう。おそらくそれが、物語の面白さ、または、主人公の強さや魅力を引き立たせる効果的な展開なのだ。作家たちはそういうストーリー創造のコツをよく心得ている。

つまり、それらは主人公達を迎え入れるための華やかなレッドカーペットであり、彼らがその先で輝かしい栄光を掴み取るための荘厳なる道筋なのである。

そして、そこには、他の何人たりとも足を踏み入れてはならない選ばれなかった者たちはその周囲にちらほらと見える、細く曲がりくねった小石の転がる進みづらい道を歩むのだ。

そう、それこそが、脇役たちの運命。

しかし――。

しかし、ひよんな事から、とある脇役がそんなレッドカーペット

の上に転がり込んでしまったならば、どうだろう。

そう例えば、

ある日、学校で、

知らない女の子から、

いきなりラブレターを受け取るとか。

そんな主役っぽい展開に、巻き込まれたなら、どうだろう。

そんなこと知るか、だって？

そういうだろうと思った。

しかしながら、こっちは本気で聞いているのだ。出来れば、真面目に答えて欲しい。

これは僕からのSOSなのだ。

なぜなら今まさに、脇役であるはずの僕が、そのものズバリの展開に巻き込まれているのだから。

ここはいつもの学校。

生徒たちが頻繁に行き交う、放課後の昇降口だった。乾いた土の匂いと、乱雑な生徒たちのおしゃべりの声に満ちている。いつも通りで、何の不穏な空気もない、日常がそこにはあった。

しかし、下駄箱の前に立った僕の体は震えていた。それは何も寒

いからではない。

僕は普段体験しえない、非日常的な状況に、動揺していたのだ。もう少し説明しよう。

僕はおよそ、ロマンチックな展開とは無縁そうなこの場所で、今まさに、ロマンチックな目に遭っているのである。

いや、目に遭っていた、などと表現すると、これはロマンチックに失礼だろう。訂正したい。

これならどうだろう。

ロマンチックに、ぶん殴られていた。

今度は少し乱暴すぎるか？ いや、今の僕の心境をより正確に例えるならば、そんな感じだ。

「これって、マジ、だよな」

僕の右手には、可愛らしい花柄の封筒が握られていた。近くで嗅げば、ストロベリーの匂いすらしそうな、柔らかな肌触りがしている。

そして、それは、たった今、僕の下駄箱の中から出てきたものだった。

それが、何を意味するのか、察しの良い方は、もうすでにお気づきであろう。

そう、これが所謂、ラブレターである。

ちなみに、内容の文章がこれだ。

『突然のお手紙、申し訳ありません。こんなものをいきなり受け取って、とても驚かれていますことだと思います。けれど、どうしても我慢できずに、書かせてもらいました。あなたの事を思うと、いつも胸がドキドキして、苦しくなって夜も眠れなくなるのです。それくらいに、あなたのことが気になっています。ですから、どうか、お願いします。今日の放課後、体育館倉庫に来てもらえませんか。私

の気持ち、聞いてください』

これは間違いない。

ああ、初めて見た。こういうのって、存在したんだ。

僕はまるで新種の恐竜の化石を発見した考古学者の気持ちだった。いやいや、今まで仮説上ではいると言われていましたが、まさか本当に発見出来るとは。ここはコイブミーサウルスとでも名づけましょうか。はい、本当にどうもありがとうございました。都市伝説じゃなかったんですね。

僕はその桃色の封筒に記載されている宛名を確認する。

『二年、Bクラス、広宇須創様』

と、ある。

紛れもなく、僕の名前である。こういう時って、何かの間違いで他人宛てのものが紛れ込むパターンがあるけれど、今回はその例でもないらしい。

「本当に、僕への、ラブレター？」

深く吸い込んだ息を吐き出すことも出来ず、震える手でそのラブレターを裏返すと、そちらには丸っこい少女らしい文字で、『一年、Aクラス、墓丘ひつぎ』とある。

知らない、少女の名だった。

墓丘なんて、変わった名前だな。僕はぼんやりと思う。少なくとも、生まれてから一度も聞いたことがない。

本当にこの学校の生徒なのだろうか。何だかいかにも嘘っぽい。動揺しながらも、僕はこのラブレターの信ぴょう性について考えていた。しかし、僕にはその嘘っぽさが、逆にその手紙に真実味を持たせているような気がした。とりあえず、信じてもいいかな。

僕はそのラブレターをそつとカバンの中に突っ込むと、はやる鼓動を抑えて、ふっと深呼吸をした。新鮮な空気が僕の意識を明瞭に保つ。

行くべきか、行かざるべきか。その二択だ。

逡巡したその時、僕の脳内に、小鹿万美の笑顔が浮かぶ。

そうだ。その少女がどんな子だって、別にいい。悩むまでもない。僕の答えはいつだって決まっている。

丁重にお断りしよう。申し訳ないけれど。僕にはすでに愛そうと心に決めた人がいるのだ。僕は決意を固め、ぐっと拳を握る。

「とにかく、行ってみるか」

僕の足は校門に向かう生徒たちの群れを逸れて、体育館の方に向いていた。

「体育倉庫」と薄汚れた文字が書かれたプレートのドアの前で、僕は高鳴る鼓動を抑えつつ、右往左往していた。

周囲には人気がないため、とりあえず、僕が不審人物として、誰かに通報される危険性はない。ならば、もう少しだけ、心を落ち着けよう。

僕は扉に寄りかかり、大きくため息をついた。

果たして、本当にここにあのラブレターの差出人はいるのだろうか。

半信半疑のままでも、僕は期待する気持ちを押さえられなかった。ああ、いや、弁解させて欲しい。

別に、僕がラブレターの差出人が美少女だったらいいなあ、とか

安易な妄想を抱いていたわけではない。僕の愛はただ一つ、万美さんへと向かうものだけに限られるのだ。

断じて、それが変わることはない。

ただ、これはちよつと、生まれて初めてラブレターをもらったことに対して、ほんの少し嬉しく思っているだけであり、その延長線上で、ラブレターを書いた人物とは如何なる人間なのかという至極真つ当な知的好奇心から沸き出た期待があるだけであつて、決して浮気心があるわけではない。神様に誓つて、そう言える。

そう思い、自分で頷いた後で、僕は意を決して、倉庫のドアノブをひねつた。

すると、まず漂ってくるのは、むわりとした埃と汗の混じつた凝縮された匂いだった。僕は思わず鼻をつまみたくなる。

ああ、臭い。一体どうしてこんなところで待ち合わせなくてはならないのだ、と思うが、ここが一番人の目につきにくい場所なのだろうと思つて納得する。

多少、泥臭くても、周囲に人の気配のないこの場所こそが、秘めたる想いを打ち明けるのにうつつけの場所なのだ。そう思うと、またしても心がほんの少しときめいた。

倉庫の中は暗かった。

夕暮れの光が、室内の上部にある換気扇の隙間から僅かに零れているのみで、倉庫内は闇に満ちていた。ぼんやりとした明るさの中で、周囲に乱暴に置かれた道具類が眼に入る。バスケットボールが転がっているのを見つけて、僕は拾い上げ、かごに戻した。

まだ、ラブレターの差出人は来ていないのだろうか。

墓丘さん、だっけ？

もしかすると、僕に想いを打ち明けるのが怖くなり、まだ教室で迷っているのかもしれないな。

そう思った僕はとりあえず、待つことにした。しかしながら、こ

う室内が暗くては転がっているものに躓いて怪我をしてしまうかもしれない。

そうだ、どこかに電気のスイッチがあったはずだ、と思い出し、僕は倉庫の壁に手を這わせる。

確か、この辺りにあったはずだけれど……どうにも見つからない。反対側の壁だっただろうか。そう思って、倉庫の中央部を横切った時だった。

ふと、顔に、何かがぶつかった。

「え？」

棚からぶら下げてある何かの道具だろうか。と一瞬、無視しようと思った僕だったが、なんだか気になり、もう一度よく見てみた。すると、その形状から、ぶつかったそれが何なのか判明する。

変だな、これ。

靴、じゃないか。

どうして、こんな場所に靴がぶら下げてあるんだ？

さすがに妙だと思い、僕はその靴をもう少しだけ、触ってみる。すると、さらに意外なことが分かった。

なんと、その靴には、誰かの足が入っていたのだ。

「そ、そんな……」

僕の言っている意味が分かるだろうか。

つまり、この靴は、誰かが壁や天井にぶら下げていたのではない。現時点で、『誰かが履いている靴』なのである。

後一つ、重要な情報を付け加えておく。

空中、で――。

そう、空中で、地面から離れて、靴を履いている状況が分かるだろうか。

なんだそれは、浮遊術でも使っているのか、そう思いになられる方もいらっしゃるだろう。しかしながら、今回はそのような比較的楽観的な予想は当てはまらない。出来れば、もっと絶望的な可能性を考えて欲しい。

それが、何を意味するのか。

僕には、その時点ですでに、おぼろげながらも、理解できていた。そのため、その薄暗がりの中で、おそるおそる、本当に恐る恐る頭上を見上げた。そうでないことを祈りながら、ゆっくりと見上げた。

しかし、

そこにあったのは、

案の定、首を吊った、少女の死体だった。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 2

「嘘、だろ……？」

僕は後ずさりながら、今にも消え入りそうな声でそう呟いた。頭の芯がぼうつとして、どんどん意識が白くなっていく。

そんな馬鹿な、そんな馬鹿な、そんな馬鹿な、そんな馬鹿な……。今日一日、見たり聞いたりしたものを全てリセットしたい気持ちである。

と、背中が壁にぶつかり、退くべき方向を見失った僕はずるずるとその場にへたりこんだ。息が苦しくなり、鼓動が爆発しそうなほどに拍動しているのが分かる。

小柄な少女の死体が、目の前で、静かに揺れていた。それは、倉庫内の薄暗がりの中でぼんやりと浮かび上がり、その明暗の具合が、僕に酷く非現実的な感情を抱かせた。

よく見ると、その足元の近くには蹴り倒したと思しき脚立が倒れている。少女のか細い首にはロープが括られており、そのロープは落ちないよう頑丈に天井に打ち込まれたフックに引っ掛けられていた。

「ああ……」

間違いない。

これは首吊り自殺だ。

人生に絶望した少女が、この場所で今日、命を絶ったのだ。その事実が、僕の脳内を麻酔のように広がる。

少女の口元から、鮮血が零れ、コンクリートの床にぴちゅんと落ちる。紛れもない、死がそこにはあった。

どうしたら、いいのだろう。

僕は、一体……。

真っ白な闇が意識を覆い尽くす前に、心の声が聞こえた。

とにかく、誰かに、助けを呼ばなくちゃ。このまま座り込んでいても、何も解決しない。僕はそう決断を下す。

しかし、すっかり腰が抜けてしまった情けない僕は、体を自分で持ち上げることすら叶わなかった。体に上手く力が入らない。

くそ、と自分を叱咤する。情けねえ。

早くすれば、もしかすると彼女は助かるかもしれないのに。立て、立てったら、僕の足！

「――っちゅい」

ほら、早くしないと風邪引くだろう。

「へっちゅい」

死体だって、寒いんだから……え？

僕は耳を疑った。そして、一瞬躊躇してから、もう一度、少女の死体に眼を向ける。すると、

「――ズルズルっ」

その死体は、赤くなった鼻を、豪快に啜っていた。

「ああもう、これだからや鼻炎は」

と、鼻声でぼやき、そこでちらりと、僕と目があった。まるで状況が理解出来ていない僕が、「生きているのか？」と問いかけようとした言葉を遮って、彼女は悶絶した。

「うわああん、またやっちゃったあ！」

宙ぶらりんの姿のまま足をじたばたを動かす。ひらひらとスカートが揺れ、そこから小さな膝頭が覗く。

「もう私ってば本当に肝心な時にダメなんだか……っちゅい！」

またしても少女からくしゃみが飛び出した。それを見かねた僕は、何を思ったのか、無意識にポケットからティッシュを取り出していた。そして、宙に浮いている彼女に差し出す。すると、彼女は馬鹿丁寧にもそれをお辞儀をして受け取った。

「ああ、すいません。私、昔から鼻が弱くて、こういう埃っぽいところに来るとくしゃみがとまらなくなっちゃって……ってそんなことじゃなくって！ あ、っちゅい」

「と、とにかく、鼻水を拭け」

「ふあ、ふあい、ずびばぜん、ふびーーー」

そして、彼女は首をつった奇妙な態勢で盛大に鼻を鳴らした。

「——とりあえず、話を整理すると、君は死んでないってことだな」

僕は新しいポケットティッシュの切り目を破りながら、彼女、墓丘ひつぎに訊ねた。倉庫の壁に寄りかかりながら、僕は未だ、安堵のため息を吐きつつ、高ぶった気持ちを落ち着けていた。

墓丘ひつぎはまだ鼻の詰まりが悪いのか、ふがふがと不快そうに息をしながら、そんな僕を見上げる。

「ええ、そうです。私の顔色を見てください。つやつやして元気いっぱいなのが分かりますよね？」

と、柔らかそうな頬の肉を引っ張って見せる。

「さっきまでは、ただ私は死んだふりをしていただけなんですから」
なるほど、と僕は一つ一つ確認するように頷く。そして、僕は足元に置かれた、細いロープのようなものと、体を動かさないために用意された固定具を見た。

これは先程までこの墓丘ひつぎが身につけていたものである。
何でも、彼女はそれによって、宙にぶら下がり、死体の振りをしていたのだそうだ。僕は気が動転するあまりに、その仕掛けに気がつかなかったが、冷静になれば、誰にでもそれと分かる簡単なトリックだった。

それを見破れなかった事は情けないが、しかし、それはもはやどうでもいい。

僕は、隣で口元の血糊を拭きとっている彼女に視線を向けた。今はその一見すると、とても大人しそうで控えめに見える、小柄な少女がどうしてこんな突拍子もないことをしようとしたのか、その理由を聞き出す必要がある。

すると、僕が無言で見つめていることに気がついたのか、彼女はびくりと体を竦め、ティッシュで恥ずかしそうに口を隠した。

「な、何ですか、先輩」

「これは、何かのバツゲームなのか？」

「え？」

僕が訊ねると、彼女は合点がいかないのか小首を傾げた。

「どういう意味ですか？」

「だから、こんな場所に僕を呼び出して、驚かせたってのは、誰かから指示されたのかって聞いているんだ」

そう聞いたのには理由がある。僕には、その誰かに心当たりがあったのだ。いつだって、横柄な態度で、他人の不幸の匂いが大好きな阿漕な僕の先輩のことである。

劇団レディーバードの団長。黒宮赤灯。

死体で僕を驚かせようとするなど、如何にも彼女がやりそうな手口である。きっといつもの気分で僕の仰天する顔が見たかったに違いない。

こんな話をすれば僕は今にも彼女の高慢な笑い声が倉庫内に響くのではないか、と思ったが、残念ながらそうはならなかった。

「別に、そんなことはありませんよ」

とひつぎも首を振る。

「本当に？」

「本当ですよ」

「依頼主から口止めされてるんじゃないだろうな」

「違いますったら。これは全て私の意思でやったことです」

ふん、と胸を張りながら彼女は宣言する。いやいや、威張れるほど立派なことをしてないだろう。死体に化けて人を驚かすなんて、ブラック過ぎる。本気で心配したんだぞ。

「それで、なら、僕に何の恨みがあるんだよ」

「はい？ 恨み？」

すると、彼女はまたしても意味が分からないという表情で僕を見た。

「そんなものではありませんよ」

と首を降る。

「私が先輩のことを怖がらせようなんて、ちっとも……っちょい！
興奮したせいか、彼女はまたしても盛大にくしゃみをした。たら
ん、と鼻水が垂れている。

「ほら、新しいティッシュだ」

「ああ、ずびばぜん、ぜんぱい。ふびーー」

彼女はごしごしと鼻を擦る。普段からそうしているせいなのか、
鼻の頭はすっかり赤くなっていた。ヒリヒリしないのだろうか。
ともかく、僕はそれが終わってから改めて訊ねる。

「それで、僕を怖がらせようとしたんじゃないけりゃ、どうしたかつ
たんだ？」

「え、ええと、それは……」

すると、急に言葉が小さくなり、ごによごによと彼女は俯きなが
ら、僕から視線を逸らす。何がそんなに恥ずかしいのか、頬を染め
ていた。

「そ、それは、だから……その、同じだと……思っ

「何が同じだよ」

「ですから、同じ、趣味だと思ったんです」

「趣味？」

訳がわからない。

「どういう趣味さ」

「その、首吊り……」

「は？」

「ですから、首を吊って死体になるのが、ご趣味なのかと、思ってお友達になれそうかなって……」

僕は彼女からの思いがけない言葉に、またしても気が動転しそうだった。一体、これは、僕に何を理解しろと言うのだ。驚くのと呆れるので、僕の声は裏返った。

「ど、どこの世界に、そんな奇特な趣味を持った奴がいるんだ！」

なんだそれは、ドMか！

超絶ドMか！

寝言は寝てから言え！

「まあ、僕もMだけだな！」

誰も聞いていない阿呆な独白を無意味に叫ぶ。

すると、ぎゅっと、いきなり片手が包むこむように握られた。一瞬、どきりとして、気が抜けて、彼女を方を向く。

「います、ここに」

彼女は目を閉じながら、まるで祈りを込めているようだった。

「私、死体になるのが趣味なんです」

そう満面の笑みを浮かべて言った彼女の小さな唇から、たらりと血糊が垂れた。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 3

「いや、それは勘違いだ」

僕は彼女の顔を見ながら、きっぱりとそう告げた。

「僕にはそんな珍妙な趣味はない」

すると、それまで咲き誇る花のように膨らんだ笑顔を見せて、はしゃいで話をしていたひつぎの表情が止まった。

「え？」

それはまるで、それまでふわふわと揺れていた花が突然、風を失ったかのようだった。

「いや、だから、僕には墓丘が言ったような死体になりきる趣味はないって」

しかし、構わず僕は事実を告げる。

「すっきりさっぱり、そんなものとは縁がないんだよ」

そして、僕は、一步彼女に近づくと、凍りついてしまったひつぎがその手に持っている携帯電話を覗き込んだ。

その画面にはとある画像が先ほどから表示されているのだが、僕は改めてそれをじっくり観察してから、大きくため息を吐く。

彼女が先ほどから僕に誇らしげに見せているそれは、この僕を、広宇須創を映した写真だった。

それが普通の写真ならば言うことはないのだが、遺憾なことに、そこには異常な態勢でミノムシのようになった僕が映っていた。説明を付け加えると、見事なまでに綺麗に縄でぐるぐる巻にされ、校舎の壁に吊るされた状態で泡を吹いて気を失っている無様な僕が撮影されていたのである。

ここまで話せば、もはやさらなる説明は不要であると思うが、一応、述べておこう。

彼女が持っていた画像というのは、僕があゝの暴君、黒宮赤灯嬢によつて校舎の屋上から突き落とされた、あの日のものだったのである。

一体、こんな不名誉な写真、いつ撮られたのだろう。もし、撮られたのならば、必ず記憶しているはずだ。

僕は驚きつつもそう思って、先ほど、記憶を遡ってみたのだが、肝心の記憶がある場所にはぽっかりとした空白が空いているだけだった。

そう、あの時の状況というのは以前にも話したと思うが、哀れにもミノムシバンジージャンプを強制されることになった僕は、蹴り落とされ宙に浮いた時点で意識を失い、それ以後、教師たちによつて救出されるまで記憶が残っていないのである。だから、あの騒ぎの中墓丘ひつぎを見かけたことも、これでもかと執拗に様々なアングルから写真を撮られたことも（既に僕は彼女が撮影していた写真をうんざりするほど何枚も見せつけられていた）、覚えていなくて無理はないのだ。

おそらくだが、こうして今日ひつぎと会わなければ、その事實は闇に葬られ、永遠にその蓋が開けられることはなかったであろう。僕は再びそう思ってぞっとしつつ、

「うへえ……」

と舌を出して呻いた。

画面の中の僕は完全に伸びきったラーメンのような表情で、だらしなく開いた口元からは唾液がこぼれていた。
なんともみっともない顔である。

「本年度の消し去りたい過去オブザイヤーに輝くにふさわしい作品だな」

後からこっそり消去しておくか。

まあ、僕がそう思ったことはさておき。

なぜ、彼女がこんな珍奇な画像を所持し、僕に見せつけていたのか、という状況説明に移ろうか。

しかし、そうは言っても、説明することなどほとんどないのだけだ。

つまり彼女は、こんな風に無様に屋上から吊るされた僕の姿を見て、自分と同じ趣味を持った人間なのだと思ったわけである。

なるほど、と僕はうなづく。

確かに見ようによつては、彼女が好む、首吊り状態の人間にも見えない。

彼女はそれによつて、僕を同種の人間と見なし、先ほど写真の中の僕を指さして、「さすが先輩です！」と賞賛したのだ。

『私なんて、そこら辺の小部屋で誰にも見つからないようこっそり死体ごっこをするのが限界ですが、先輩はその点、スケールが違います。まさか、校舎の屋上からその身を投げ出し、盛大な宙吊りで大衆の注目を一身に浴びるとは、やることが過激ですよ！』

どうやらあの出来事以降、彼女の中で僕という存在が暗闇の中パツと点いた蛍光灯ランプのような憧れの人物として、どでん、と現れたらしいのだ。

そして、いつの間にか、このままでは自分の気持ちが収まりきらないと思うようになった彼女は、今回のラブレター、もとい、お友達になりましょうよ、そして、私と一緒に首をくくりましょうよレターを書くに至ったのだという。

それが今回の事の顛末である。

全く、人騒がせな勘違いだ、と僕は思う。

危うく、本当に自殺だと勘違いして、また学校に警察を呼ぶところだった。

「はあ……」

やれやれ。

すると、僕が大きくため息をつくのと同時に、それまで固まっていたひつぎが大きく息を吸うのが分かった。

[illegible]

と、いきなり後ろに吹っ飛んでしまいそうな勢いで、絶叫する。

僕は身の危険を感じ、思わず耳を塞いだ。

「何だよ、いきなりどうした」

鋭くひつぎに視線を向けた。

「どうしたもこうしたありませんよ、それって本当なんですか？」

彼女は目を白黒させてあわあわと口を開閉している。

「何が？」

「だから、死体になる趣味はないって言ったことです」

「ああ、そのこと。もちろん本当さ」

僕はそこで、彼女に事情が分かるように、黒宮先輩なるこの学校に生息する暴食恐竜に部の宣伝のためと屋上から突き落とされるまでの悲劇的な経緯をドラマチックに話し、彼女の考えが単なる勘違いであることを改めて指摘した。

僕は、なるべく彼女に面白く伝わるよう、話にさりげないユーモアを交えて語ったつもりだったのだが、話が進むにつれ、彼女の表情は明るくなるどころか、重たく暗いものになっていった。

きっと、自分がこれまで信じていたものとは違う現実に絶望しているのだろう。無理もない。

この広い世界で、皆無に等しい自身と同じ価値観を持つ人間にようやく出会えたと思って、大喜びしていた矢先なのだから。

「……そう、なんですか」

と最後まで話を聞いた彼女は、うつろな目をして俯いた。

「それは、つまり、先輩と同じ趣味を持つお友達にはなれないってことですね」

「あ、ああ、残念ながら」

「……」

「……」

どちらも、話さない。

沈黙が、妙な重量を持って、僕の肩にのしかかってくる。僕は急にしみりとした空気になったこの場をどう取り繕ったらいいのか、と考えを巡らせた。

これでは、どう見ても、告白してふられた女子生徒とふった男子生徒である。なんとも居心地が悪い。

僕はいたたまれなくなった感情を抑えこむように唾を飲み込み、隣でしょげているひつぎを見た。

その横顔はまるで、仲間と一緒に空を飛べないと告げられた小鳥のように絶望しきっていた。ただでさえ小柄な体つきなのに、そのせいで、先ほどより幾分も体が縮んだように見える。

さあ、これはどうしたものか。

僕が対処に困っていると、ふいに、

「先輩」

彼女が口を開いた。

「何だ？」

「申し訳ありませんでした」

「……」

彼女は俯いたままで謝った。

「私の勝手な勘違いで、先輩のことをこんな風に驚かせてしまって」

「いや、別にいいさ。もうそんなに気にしていないよ」

「……本当ですか？」

僕は頷いた。

「ああ、本当さ」

こんな僕では、彼女の沈んだ気持ちを上手く慰めることは出来ないが、せめてもの救いのために、今回の出来事は全く怒っていないことを告げた。

「きちんと事情が分かったことだし。ほっとしたよ」

しかし、そうですか、と呟いた後で、彼女はやはり寂しそうに顔を伏せる。

「でも、これで『初めてのお友達』を作るのは、また次の機会ですね」

「うん？」

僕が彼女のどこか含みのある言葉を聞き返すと、彼女はポケットからハンカチを出し、見られるのが恥ずかしいのか、赤くなっている鼻の頭を押さえた。

「ああ、あの、私、実は友達、いないんです」

「え？」

これには、驚いた。

「どうして、そうなの？」

僕は意外に思って訊ねる。

確かに、彼女は他人が理解出来ない珍妙な趣味を持っているものの、話は通じるタイプだし、時折見せる笑顔は明るく愛嬌のあるもので、決して他人を遠ざけてしまうようなものではない。さらに彼女にどこかおっちょこちょいな一面があるのも、周りから見れば放っておけない、いつも見守っていたい存在として認知されそうで、勝手に他人の方から寄ってきそうなものである。

しかし、

「よく、わかんないんです」

と、彼女は困ったように首を振る。

「別に他人に対して冷たい態度を取っているわけでもないですし、他人と仲良く出来るよう、なるべく会話をしているんですけど」

彼女は切なげに、言葉をつなげた。

「やっぱり……私は、何か根本的な部分で、他人と交われないものを持っているんだと思います」

たとえば、死体になるという奇妙な趣味が他者に知られていなくても、他人からしてみればどこか、近寄り難い異質な気配を感じているのかもしれない。

彼女はそう言った。

私は、『外れ者』なんですよ。

その言葉が、僕の中に、暗い鐘の音のようにずうんと響いた。

「今回なら、もしかして、っと思ったんですけどね」

へへ、とひつぎは力なく笑い、赤い鼻をごしごしとこすった。それはまるで、ノートの汚れを消えにくい消しゴムで必死に取ろうとしているかのような仕草に見える。それが何とも小動物チックな動作で、可愛らしいなと僕は思った。

「でも」

彼女は、ふんわりと笑う。

「今度がダメなら、次を頑張ればいいんです」

その言葉は、不思議な力に満ちた、明るさを放っていた。

「え？」

「失敗したら、その経験を活かして、またチャレンジする。それが私のモットーです……っちょい！」

僕は、突然、胸を射抜かれたような気持ちになっていた。
何だよと、思う。

こいつ、すごくポジティブ、なんだな……。

僕よりも、ずっとずっと。

僕は静かに微笑みながら、無言でポケットティッシュを取り出し、彼女に差し出す。

「ほら、拭けよ」

「ああ、ずびばせん、ぜんぱい。ふびーー」

彼女はそれを受け取って、お礼を言った。

「……いいよ」

僕は、静かに、了解する。

「ふぁい？」

「僕で良ければ」

「何が、ですか？」

「墓丘の友達にしてもらえないかな？」

「……は、はい？」

そして、一拍置いて言葉の意味を理解した後の彼女の表情の変わり様といったら、筆舌に尽くしがたいものがあつた。まるで、そう、しおれていた花が一滴の水で、一瞬にして生き返るかのような、劇的な変化だったのである。

「本当ですか！」

とはちきれんばかりの笑顔で叫ぶや否や、いきなり、僕に抱きついてくる。

「うわあああ！」

僕は彼女を押さえながらもふんわりと柔らかい感触が顔に触れるのが分かった。彼女が頬ずりしているのだ。

「先輩、先輩、先輩！」

「ちょっと待て、ティッシュを捨てろ。鼻水が服につく！」

「ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます！」

「お、落ち着け、墓丘！」

「ああ、もう、私、嬉しすぎて泣いちゃいそうです……へっちょい！」

そのくしゃみの弾みで、僕は彼女に抱きつかれたまま、背後に倒れこむ。すると、倉庫内に溜まっていた埃が盛大に舞い上がった。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 4

「——というわけで、大変だったわけですよ」

僕が話に区切りを付けると、隣の万美嬢は大きく感心のため息を漏らした。まるで半分気が抜けたような顔をして、

「そうですか、死体になりきる趣味、ですか」

と呟き、小首を傾げた。それに合わせて、髪につけた花飾りがしやりんと揺れる。

ここはいつもの公園である。ええと、それ以下の情報は以前に説明してあるので、必要ないだろう。大体同じと思ってくれている。

僕は、ベンチの上で大きく伸びをした後で、万美嬢を横目で観察した。

彼女は眉をひそめて、無言になっている。何かを考えているのだろうか。

当然だろうな、と僕は思う。

僕だって、彼女と同じ立場なら、そんな風に考え込んでしまうだろう。何しろ、未だかつてそんな珍奇な趣味を持った人間など、聞いたことがないのだから。一体、そいつはどういう心理なのか、と分析したくなる。

おそらく彼女がそういう状態なのだと察した僕はそこで敢えて彼女に言葉をかけ、次なる会話を続けようとはしなかった。

それはなぜか。

いつものように花の如く美しく聞き上手な彼女が、その死体なりきり少女に対してどのような意見を述べるのか、少し期待していたからである。

すると、しばらくして、万美嬢は僕が見つめているのに気がついたようで、ちらりとこちらを確認した後、にこりと笑った。

「な、何ですか？」

その笑顔に蕩けまいと僕は踏ん張る。

「その方、墓丘ひつぎさん、でしたよね」

「はい、変わった名前の奴ですよ」

「いえいえ、そういうことじゃないです」

と、彼女は首を振る。

「と、いうと？」

「とても勇気のある人になって。私、少し尊敬しちゃうんです」
「勇気がある？」

僕ははて、と首をひねる。

彼女のどこに勇気があるのだろうか、と考え、行き詰まる。

ああ、人前で首吊りの格好を披露することか。

と思ったが、彼女は少し違いますと否定した。

「私がすごいなって思ったのは、そういう趣味があることを広宇須さんに打ち明けようと思ったことですよ」

「はあ……そりゃあ珍しい趣味ですからね」

地球人全員にアンケートを取った所で、そんな人間がいるとは断言し難い。

しかし、万美嬢はそれだけではないんです、とちよつとムツとするような顔をした。

「広宇須さんが思っている以上に、私たち女の子にとって、そういう行為っていうのは、もっとハードルが高いものなんです」

「ハードルが？」

そういうもの、なのだろうか？

僕にはちよつと理解出来ない。

「どういふことですか？」

「あのですね、広宇須さん。女の子には往々にして、他人にはおいそれと口外出来ない、大事な秘密があるものなのです」

「はあ……」

「きつと、その死体になりきるといふ趣味は、その墓丘さんにとつてとても重要な秘密だったのでしょう。私には、それが彼女の心の一番脆い部分と結びついた事柄だと思ふのです。それを他者に向けて開示するといふことは、下手をすれば自分が傷ついてしまうかもしれない危険があります。ですから、それを広宇須さんに告げる時には、とても勇気が必要だったに違いません」

「そんなに、ですか？」

「ええ、そんなにです！」

「……」

いつになく、熱心な彼女の様子に、僕は少し戸惑う。僕がじいつと彼女を見つめていると、彼女は我に返って恥ずかしくなったのか、胸元でぎゅつと握っていた拳を下ろして、視線も逸らした。

そこで、僕ははつと悟って、

「さ——」

ては、小鹿さんにも何か秘密が？

と聞きそうになって、何とか思いとどまる。口を縛るようにぐつと閉じた。

それがなんとも無粋で不躰で、彼女に対する配慮に欠いた行為に思えたからだ。

しかし、彼女は僕のそんな気持ちを察していたようで、唇に人差し指を当て、

「ふふ、いくら広宇須さんにも、言いません」

とどこか精一杯という風に笑ってみせる。そして、ほんのり頬を色づかせて視線を逸らし、

「こんな私は、意気地なしに見えますか？」

と、少し悔しそうにはにかむのだから、僕はまた胸を鷺掴みにされたような気持ちになる。

「いえ、そんなまさか！」

と声を上ずらせながら、否定した。

しかし、少し気が動転していた僕は、そこで余計なことを考えてしまう。あることが、途端に気になりだしたのだ。

そして、よしておけばいいのに、

「あ、あの」

とつい、『それ』を確かめたくなくて、口先が動いてしまう。

「ちなみにそれは、跳治先輩には……」

「え？ 言ってませんよ」

「あ、そうですか」

本当に僕って馬鹿だ。

それを聞いて、単純に、すごく安心してしまったのだ。ああ、良かった、先を越されていなかった。と思ってしまったのだ。

きっとその時の僕の顔はとても緩んでいたことだろう。いや、完全に緩みきっていたことだろう。

運が良かったのは、彼女にそれを見られなかったことだ。その時、彼女は顎に人差し指を当てて、宙を見上げていた。

「ですが、私は気になります」

「は、はい、何がでしょう？」

「そんなにも勇気があってポジティブな女の子が、どうして死体になりたいなどという傍から見ればとんでもなくネガティブな趣味にハマっているのでしょうか」

あ、ああ。それか。

さすが、聡明な万美嬢である。と僕は心のなかで拍手を送った。そこに気がつくとは、彼女は目の付け所がいい。僕が彼女の先生ならば、「いい質問だ！」と賞賛しているところだろう。「加えて、君は大層可憐な少女だな。抱きしめてもいいかい？」というところまでいったらセクハラか。

まあ、そんな僕のしようもない妄想はさておき。

「それは、心配しないでも、これから僕が話しますよ」

と答える。もちろん、既にその辺も調査済みである。

「本当ですか？　そうなのでしたら、早く続きを聞かせてもらいたいものです」

「はい、もちろんです。それでは、ええと……」

あれ、今どこまで話したんだっけ。
すると、

「墓丘ひつぎさんと、お友達になる約束をした所からです」

彼女が助け舟を出す。

ありゃりゃ、彼女に先回りして言われてしまった。

さすが聞き上手な万美嬢である。こちらにスムーズに話が再開出来るように配慮を欠かさないとは。

「すみません、それでは続きを話しますね」

僕は頭を掻きつつ、語り始めた。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 5

ひつぎの止まらないくしゃみにいい加減うんざりしていた僕は、彼女に倉庫から出て話をすることを提案した。このままでは、僕のポケットティッシュは瞬く間に消費され、クリーニングをしたばかりの制服までも鼻水まみれになることは時間の問題に思えたからである。

すると、彼女も賛成なようで、ぴよこぴよこと跳ねるように頷き、その結果、僕とひつぎは汗臭い匂いから解放され、再び、新鮮な外の空気を吸えることになった（ちなみに、外に出た拍子に彼女はまたくしゃみをした）。

しかし、倉庫の前で出て立ち話というのも、何だか落ち着かない。どこか腰を落ち着ける手頃な場所に行こうか、と言うと、彼女は、

「それでは先輩、一緒に帰りながら話しませんか？」

と持ちかけてきた。

彼女曰く、彼女と僕の自宅の方向は同じなのだそうである。僕はぎよっとして、なぜそんなことを知っているのか、と聞くと、彼女は当たり前前の顔で、

「もちろん、先輩の下校経路をストーキングしたからですよ！」

と答えた。

なるほど、OK、と思って、納得した振りをして、僕はその驚愕の事実に対する質問を自分の中に押さえ込んだ。ここは突っ込まないほうがいいだろう。色々と面倒になりそうだし。スルーだ、スルー。

まあ、何はともあれ、こうして僕と彼女は帰路を共にすることになったわけである。

校門を出て歩き始めて、僕はすぐにあることに気がついた。彼女の背負ったカバンから長い紐が伸びていて、彼女はそれをずるずると引き釣りながら歩いているのである。

「何だよ、それ」

と訊ねると、彼女はよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに表情を綻ばせた。そして、その紐を手繰ると、その先に括りつけられていた、土だらけの何かを僕にさし出して見せる。

「パトリシアちゃんです」

とのことである。

何がパトリシアだ、と思いつつも、彼女がもっているそれを見ると、どうやら人形らしいということが分かった。

しかし、

「……う、む」

僕はこんな悪趣味な人形を見たことはない。

何しろ、この人形、首を吊っている。

つまり、カバンから伸びた長い紐はそのパトリシアちゃんなる少女の首に結わえ付けられているのである。

さらに、その人形の胴体部分を見るや、胸部にはナイフらしきものが突き刺さり、そこから血が滴っているのが分かった。うげ、と

思う。もちろん、それは布で表現してあるため、さほどグロテスクではなく、見た目的にはソフトだが、それでも尚、僕を絶句させるのに十分なほど衝撃的だった。

「……」

思わず、彼女から後ずさる。

「どうしました、先輩？」

「お、お前はなにか、パトリシアさんに恨みでもあるのか！」

「何を言います。これはこのパトリシアちゃんに対する私からの愛情表現ですよ」

「馬鹿な！」

そんな乱暴な愛情があつてたまるか！

この少女、見かけによらず、過激な奴だ！

「死体人形を持ち歩くとは……」

しかし、彼女は首を振る。

「失敬な、パトリシアちゃんは生きてます。彼女はこう見えて訓練で鍛えた非常に頑丈な首を持っているので、首を締めても死なないのです。それに、胸に刺さっているように見えるナイフも、先が引っ込むおもちゃなのです」

「お、おもちゃ」

「はい、流れている血も、血糊という設定です」

「あは、そういう、設定なのね」

「はい。そういう設定なのです」

あくまで死体の振りをしているだけなのです。

彼女のその無邪気な笑みに、つい、全てを納得しかけたが、ぎりぎりのところで僕は強く首を振った。いやいやいやいやいやいや……。

理解不能な苛立ちが胸に芽生えた僕は、右手の指を折り曲げ、即席の拳銃を作り、

「パーン！」

と彼女に向けて発砲してみた。
すると、ひつぎは予想通り、

「うぎゃあ、やられたああ！」

と、大げさなアクションでその場に崩れ落ち、歩道に倒れて動かなくなった。これがまた迫真の演技で、ぴくりとも動かない。

おお、本当に死体になったぞ。

さすが、趣味にしているだけはある。

最初はそんな風に面白半分で見つめていたが、あまりにも彼女が動かないので、次第に周囲を歩く人々が奇異の眼差しを向け始めたことに僕は気がついた。

さすがにこれはちとまずい。

「おい、墓丘。そろそろ起きろ」

僕がしゃがみ込んでそう言うと、彼女は返事をする代わりにくしゃみをした。

「っちゅい！」

もうこのパターンに慣れっこになってしまった僕は無言で彼女にティッシュを差し出す。

「ああ、ずびばぜん、ぜんぱい」

ふびー。ふびー。

彼女は赤い鼻を鳴らした。

そのまま、しばらく二人で歩いていると、川に掛かった短い橋が見えてきた。僕は少し先回りして、その橋の欄干に腰掛けると、彼女を隣に呼んだ。彼女は小さな体でとことこ駆けてきて、よいしょ、とその上に座る。

それを見届けて、僕はそこで、それまで気になっていたことを訊ねた。

「墓丘はどうしてそんな趣味を持つことになったんだ？」

「はい？」

「死体に変装するなんて、普通じゃないだろ？ でもさ、もちろんそれは墓丘なりに意味のある行為なんだよな」

すると、ひつぎは力強く頷いた。

「はい。その通りですよ」

そして、何を言うかと思えば、口を開いた彼女は、

「死体になるのは、予行演習なのです」

と答えた。

「予行演習？」

僕は面食らう。

「どういう意味だ？」

「だから、そのままですよ。人間っていつかは絶対に死んじゃうじゃないですか」

「あ、ああ、そうだな」

僕はそこでいずれ必ず訪れるその瞬間に思いを馳せて、センチメンタルな気持ちになった。最後を迎える時、僕の隣に果たして愛する人はいるのだろうか。ちらりと、万美嬢の顔が思い浮かんだ。

ややあって、口を開く。

「つまり、その時のための予行演習ってか？」

彼女ははいと頷き、そして急に真剣な顔つきになったと思うと、

「先輩は思ったことないですか？」

「何を？」

「ほら、私たちが死んだ後だって、時間は止まらずに、永遠に続くわけですよ。ずっとずっとズーザーとずっとです」

彼女は口を尖らせながら「ず」の音をやたら強く発音した。

「私たちが生きている時間なんてその膨大さに比べたらほんの取るに足らないもので、極めて短いわけです」

「……」

「私たちは、死んでからの方が多くの時間をこの世界で過ごすんですよ、先輩」

彼女はふふ、と笑う。

「そういう意味で、私にとって死は重要であり、だからこそ、今からどうやったらいい死に方が出来るか、いろいろと模索して研究をしている、というわけなのです」

なるほど、面白い考え方だな。僕はふむふむと説明を吟味する。
でも――。

「……普通、そういう考えになるか？」

「ならないですか？」

目を瞬かせて問い返す彼女に僕は反論する。

「だってそもそも死ぬなんてことをいつも考えててみる。普通は怖くなったたり逃げ出したくなったりするんじゃないか？僕は嫌いだな、そういうの」

すると、

「それこそ、私には解らないです」

これまた、強い口調で彼女はきっぱり言った。

「みなさんは死ぬことに対して暗く考えすぎなんですよ。怖い怖いと頭の中からそれを追い払って遠ざけようとする。確かに当然と言えば当然ですが、それでは恐怖は消えません。むしろ、もっと巨大

な影になって私たちの前に姿を現すことになります。そして、それをまた遠ざける。まるつきり悪循環ですよ」

と、彼女はそこで一度言葉を切る。息が続かなかったのだろう。

「いいですか、先輩。私の場合はそうはしません。いつか必ず皆死ぬのならば、それから先、どのようにハッピーに死体として存在していくかを考えればいい。私の中にある根本的な思いはそれなんです。前向きに前向きに、マイナスをプラスに持っていく。私はそう思っ、て、あの、死ひゃいにな……っちゅい！」

彼女はまたしても大きくくしゃみをした。

僕は肩からずとんと力が抜ける。

死体になれば、幸福も不幸も感じないだろうと思う一方で、僕はそう語る彼女の輝く瞳を見て、全てを理解したのだ。

謎が解けた。

ああ、そういうことか。

つまり、彼女は隠れたネガティブな一面を持っているんじゃない。それがその奇妙な趣味に反映されているわけじゃない。

死すらも肯定的に受け止める。

どこまでも底抜けで究極的にポジティブな性格が彼女にはあるのだ。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 6 (前書き)

11／27 後半部分を加筆修正しました。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 6

しばらく橋の上でひつぎと他愛のないことを話していると、道の向こうから、意外な人物が歩いて来るのが見えた。

羽山跳治先輩である。

先輩は帰宅途中なのか、背中に通学用のかばんを背負い、自転車を手で押しながら、向かってくる。

「跳治先輩！」

気づいた僕が名前を呼んで手を振ると、先輩は何か考え事をしていたのか、一瞬遅れて、こちらに目を向けた。

「何だ、奇遇だな。広宇須」

そう返事をする先輩の声はいつも通りだったが、どうにも、その表情はさえない。こちらに向けて歩いて来るものの、目は落ち着かず、キョロキョロと左右に向いている。

いつも冷静沈着な先輩にしては、妙に挙動不審である。僕は心配になって近づいてくる先輩に訊ねた。

「何かあったんですか？」

「え？」

先輩は一瞬驚いたように目を見開いてから、「ああ」と頷く。

「広宇須、こっちの方向へうちの高校の生徒が走ってきたのを見ていないか？」

「うちの高校の生徒ですか？」

僕は聞き返す。

「ああ。三年の男子生徒なんだが」

はて、通っただろうか。少なくとも、僕の記憶にはない。

僕が首を横に振ると、先輩はがっかりしたように肩を落とした。

「そうか」と小さく呟きつつ、そこで何かに気がついたのか、先輩はちらりと僕の横に目を向けて、

「あれ、そっちの子ども、うちの生徒か？」

と訊ねた。

墓丘の事を聞いているらしい。すると、隣のひつぎはその声に反応して、僕の背中に隠れるように動いたのが分かった。

「は、はい」

と押し殺したような声がする。僕が振り向こうとすると、ぎゅつと彼女が僕の服を握り締めた。どうやら、動くなと言いたいらしい。おそらく、初対面である先輩に緊張しているのだろう。僅かな震えが服を通して伝わってくる。いくら彼女がポジティブな人間であっても、今まで友人がいなかった分、他人に慣れていないのかもしれない。

「何だよ、怖がるなって。別に何もしないから」

先輩はまるで子供をあやすように優しい声で言うが、ひつぎは、

「こ、怖くなんてありません。広宇須先輩の傍にいないと寒いんで

す」

と強がった事を言う。

寒い？ もうすぐ夏が来ようというこの季節に？

苦しい言い訳だな。

「まあ、いいや」

先輩はため息をつく。

「君もここをうちの男子生徒が通ったのを見ていないんだな？」

「は、はい」

ひつぎが首肯すると、いよいよ先輩は困った表情をした。

「と、なると、ここに来る途中でやつに上手く巻かれてしまったみたいだな」

やられたな。

と悔しげに口を曲げる。

「あのう、何があったんですか？」

「いや、なに、広宇須が心配するに及ばないよ。大したことじゃないんだ」

しかし、そう言いつつも、微かに、「大したことにならなけりやいいんだが」と願望混じりに呟くのを僕は聞き逃さなかった。その不安に満ちた感情の吐露を、さすがに看過出来ない。どうやら、事態はかなり深刻なようだ。

良ければ、僕にも話してくれませんか。

そう口を開こうとした時だった。

「ああ、猫ちゃん！」

ひつぎの叫びが会話に割り込んできた。僕は弾かれるように後ろを振り返る。すると、彼女は橋の欄干によじ登り、そこから数メートル下に流れる川を覗き込んでいたようだった。

「どうした!？」

と僕は彼女が落ちてしまわないように思わず肩を引っ張りながら訊ねる。彼女は気が動転しているのか、僕を見ると、無言で川の方を指さした。

その方向を見るに、川の上流からダンボール箱に乗って、何かが流れてきているのが分かる。箱が揺れるのに合わせてか細い鳴き声を上げるその小動物は、ふさふさの尻尾を不安気に動かして動けなくなっているようだ。

「子猫か！」

何が原因かはいまいち分からないが、おそらく、川岸に流れ着いていたダンボール箱に興味を示した子猫が、好奇心で飛び乗り、そのまま箱が岸を離れ、川に流れてしまったらしい。みあみあと恐怖に晒された子猫の鳴き声の水音に混じって聞こえる。

と、見れば、隣のひつぎが身を乗り出し、橋の上から何かを伸ばしているのが分かった。長い紐に括りつけられた、死体人形、パトリシアちゃんだ。

どうやら、救出ロープのつもりらしい。

しかし、相手が人間ならば、その意図を察し掴まってくれるかもしれないが、いかんせん、相手は動物である。その作戦が有効とは

言えないだろう。

「そんなんじゃない駄目だ。川の下流に先回りして待ち受けよう」

先輩はそう言うと言わんと自転車に飛び乗り、機敏な動きで方向転換をすると、颯爽とペダルを漕ぎ、土手の方へ走り始める。僕も置いて行かれまいと背後のひつぎを振り返ると、「行くぞ」と声をかける。しかし、彼女はまだ諦めるつもりはないのか、依然、パトリシアちゃんをぶら下げたまま子猫を乗せたダンボール箱がその真下を通るのを待ち構えている。

案外頑固なやつである。

「そんなもんに猫は掴まれないよ」

と僕が宥めるのも聞かずに真剣な眼差しで揺れる水面を見ている。

「おい、墓丘」

「先輩……」

彼女はこちらも見ずに言う。

「何だよ」

「確かに下流で待ち構えるのは確実にいい作戦ですが、そこに行くまで箱が転覆しないとは言いきれません」

見てください、先輩。

と彼女は猫の入ったダンボール箱を指差す。

「既に底の部分がふやけて浸水を始めています。こうなれば一刻の猶予ありません。早く猫を救出しなければ、溺れて死んでしまう

かもしれません」

確かに彼女の言う通りだった。猫は忍び寄ってくる水の脅威を感じ取っているのか、一層大きな声で鳴き、四肢を動かして必死に箱から這い出そうとしている。

まずい。

あのままでは、箱が沈むよりも先に猫が川に転落をしてしまうだろう。

「ダメです、死んじゃダメ!」

ひつぎが叫んだ。

がり、と土が削れる音がする。

何かと思えば、彼女はなんと橋の欄干の上に乗って、今にも川に向けて飛び込もうとしていた。

「お、お前!」

「先輩、何としてもあの猫を助けましょう。私、ここから飛びます」

「ば、馬鹿、お前泳げるのか?」

「いえ」

彼女は首を横に振る。

「全くのカナヅチです」

「なら、今すぐそこから降りろ。お前まで溺れたら誰がお前を助けるんだ」

こんなことでお前が危険な目に遭う必要はない!

しかし、彼女の目に浮かんだ決心の色は揺るがない。僕の声なんて聞いていないようだ。

「先輩、誰かが目の前で死んじゃうのを、私は見逃せないんです」

死体変装の趣味のやつが何を言っているんだ。僕はよっぽどそう叫びたかった。

全く、この女、めっちゃくちゃである。首尾一貫しろ。なんで、そんなに必死な目をしてんだよ。僕をそんなに混乱させたいのか。

ようし……いいだろう。

「お前は、そこにいろ」

「はい？」

驚いてこちらを向くひつぎを無視して、彼女を引き戻すと、代わりに橋の欄干の上に立った。こういう危険な役回りこそ、脇役の定番だろうが。

「先輩、何を――」

彼女が言葉を発した時には、僕は踏み切りを終えていた。

こう見えても、水泳は得意だ。幼い頃はスイミングスクールに通っていた経験もある。飛び込みだって、何度もやった。

だから、だろうか。

川に飛び込むのに、さほど恐怖はなかった。ひゆるひゆると耳元で風が鳴く音も、冷たい水面に足から落ちた時の冷たさも、そこにあったのは、ただ使命を貫き通すという、強い意思だった。

使命って、何のだよ。

服に水が染み渡る感触の中で、僕は自問した。

子猫の命を守る使命、ってか？

そんなもの、誰から強制されてる？

ノーだ。

違う。

全然違うんだ。

僕は、僕の中の見えない使命によって、突き動かされていた。

演じろ、演じるんだ――。

内なる声が聞こえる。

分かったよ、やればいいんだろ？

腕の中に、毛むくじゃらの感触がある。捕まえた。絶対に逃さねえからな。

片腕で泳いで、岸を目指す。流れに逆らって泳ぐので、推進力を失いがちだったが、必死に息継ぎをして、体を動かす。

すると、その途中で、誰かに岸に引っ張り上げられたのが分かった。このがっしりとした手は跳治先輩だな。僕は水から飛び出し、ごろりと河原に転がると、咳き込んで空を見上げた。

そこには心配そうに覗き込む二人の顔があった。

「おい、生きてんのか、広宇須」

「先輩、先輩、ごめんなさい。私のせいで」

ひつぎは、水に濡れてすっかり毛がしぼんでいる子猫を抱えていた。寒いのか、ふるふる震えて、かよわく鳴いている。きっと母親を呼んでいるに違いない。

単純に、良かったと思った。

すると、そこで鼻がむずむずしてきて、

「つくしよい！」

僕は大きくくしゃみをした。

「つくしよい！　つくしよい！」

あーあ。僕は鼻をすする。

「ちくしょう、ひつぎの鼻炎が俺にもうつちまったぞ。つくしよい！」

「そ、それはすいません、せんぱ——っちゅい！」

僕につられたのか、彼女もくしゃみをした。

「つくしよい！」

「っちゅい！」

僕と彼女が交互に鼻をすする。

全く、何をやっているのだろう。

「でも、先輩が生きてて良かったです、っちゅい！」

死なれるのは、嫌ですから。

「あのな、あれくらいの事で死ぬるかよ」

僕は彼女の発言を軽く笑い飛ばした。

「川の深さだって、足がつく程度の浅さだったしな、つくしよい！」
「つか、あのレベルで溺れ死ぬなんてことがあるんならさ。」

僕は続けて言う。

「それはさ、水の中に落ちたことでパニックになって、上下も左右も分からなくなつて、何もできなくなつてゐる奴だけさ」

すると、その言葉に意外にも反応したのは、隣で僕らの様子を笑いながら見ていた跳治先輩だった。

「そうだよな！」

と急に大きな声を出す。僕は驚いて飛び起きた。

「な、なんですか!？」

「さすが我が優秀な後輩だ。お前はいい所に気がつく。そうか、あいつはパニックで何も分からなくなつてゐるのか。ならば、そんな人間に頭ごなしに理路整然とくどくどと説教をしたところで、理解出来るわけがない。ああ、そうだ。そうなるつまりは、あいつの気持ちを理解し、その混乱を解くことが肝要だな。説得するのは後回しだ」

何のことやらさっぱり分からん。

しかし、先輩は勝手にぶつぶつと呟き、何かに閃いた表情になっている。事情は分からないが、どうやら、僕は無意識の内に先輩が先ほどから抱えていた悩みを解く手助けをしていたようだった。

まあ、良かった、のか？

「つくしよい！」

そこで僕はまたくしゃみをした。

すると、ひつぎがポケットからティッシュを取り出し、甲斐甲斐しくも僕の鼻に当ててきたので、僕は盛大に鼻を鳴らしてやった。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 7

翌日の放課後のことである。

「本当に、いいんだな？」

僕は廊下を歩きながら、隣を歩く小柄な少女に何度目かも分からない確認をした。

「本当に、あの黒宮先輩に会ったんだな？」

すると、その少女、墓丘ひつぎはむっと口をへの字に曲げて、不快感をあらわにした。

「しつこいですよ、先輩」

と、睨んでくる。

「私は一度決めたことは基本的に撤回することはないんです。会うと言ったら会います。何度訊いたって答えは変わりませんよ」

「……そうか」

僕はがっくりと首を垂らした。

すると、それを見てだらしないと思ったのか、ひつぎが僕の背中を叩いてくる。

「ほら、もっとシャキツとしてくださいよ、先輩。たかだか、先輩の先輩に会いに行くだけなんでしょう。何をそんなにビビってますか」

いやいや、誰だってビビるよ。あんな先輩に出遭ったりなんかしたら。

「お前はあの黒宮先輩を知らないからそういうことが言えるんだ」

「そんなに怖いんですか？ その黒宮先輩って」

「怖いなんてもんじゃねえよ。昨日だって話しただろ。僕はあの人に殺されかけたんだ」

だから……。

「僕はお前を黒宮先輩に引き合わせるのが嫌なんだ。もしかすると、先輩に気に入られ、格好の標的にされて、墓丘が僕に次ぐ第二の犠牲者となりかねないんだぞ。僕は墓丘のことが心配なんだ」

すると、その言葉を聞いて、なぜかひつぎはくすりと微笑んだ。

「な、何だよ。僕が何かおかしいことでも言ったか？」

「ふふふ、違いますよ。心配してくれるなんて、先輩は優しいなって」

「……」

思わず、閉口してしまう。

ああ、もう。そういうことじゃないんだって。僕は照れてしまった頬を隠すのに、一瞬俯いて、そこで、ふとあることに気がついた。

「しかし、墓丘」

と、彼女を見る。

「何です？」

「お前、僕のこととは別として、初対面の人間と話をするのは、好きじゃないんだろう？ それは大丈夫なのか？」

「え？」

「だって、お前、昨日跳治先輩にはあんなにビビってたじゃないか。ほら、怖がって僕の後ろに隠れただろ？」

「ああ」

すると、彼女は唇に指を当て、昨日の出来事を思い出しているようだった。そして、しばらくすると、その彼女の表情に不安げな色が映るのが分かった。

「あの人は、別ですよ」

「別？」

はい、と彼女は頷く。

「お尋ねしますが、先輩は昨日、あの人を見ても、『何も感じなかった』んですか？」

「……何のことだ？」

僕には合点がいかない。

昨日の跳治先輩は何かおかしいところでもあっただろうか。ああ、そう言えば、何かを悩んでいる様子だった。

しかし、僕がその点を告げると、彼女は首を傾げた。

「確かに、そんな風にも見受けられましたが、それだけではなくて、もっと奇妙な印象は受けませんでしたか？」

「いや、別に先輩は普通だと思うけど……なんだよ、その奇妙な印象って」

「ええと、その、なんていうか……」

彼女は口をもごもごとさせて、言いあぐねている。自分が思っていることを上手く口に出来ないのだろう。

「とにかく、あの人はどこかおかしいんです。何だか、もやもやするっていうか、不気味っていうか……」

先輩が不気味だって？

なんだよ、それ。

僕は呆れて鼻息を飛ばす。

「僕にはよっぽどお前の方が不気味な人間に見えるがな」

「も、もう、なんですかそれ！」

そうして、憤慨した墓丘が僕のことをぼかぼかと叩いた時だった。廊下に、聞き覚えのある声が響いた。

「何だ、そこにいるのは我が愚鈍なる後輩、広宇須創ではないか！」「げっ」

僕は背筋が凍りつくのを感じる。廊下の向こうに立っているのは、紛れもない凶暴肉食獣、黒宮赤灯である。彼女は僕の顔を見た途端、ものすごいスピードでこちらに向かってきた。まるで、彼女が通った後には、ごうっという風の音が聞こえそうなほどの超突進である。僕は身震いする。

油断した。部屋にいたと思ったのに、よもや、こんな場所では会うとは思ってもみなかった。

もはや逃げられそうもない。

何とかして、ひつぎに興味が向くのを阻止しなければ。僕はそう

思って、さりげなくひつぎを隠すように彼女の前に立つ。

「ど、どうも先輩。今日はご機嫌がよろしいようで」

とりあえず、挨拶だ。

「うむ、そうだな広宇須。私は機嫌がいい」

「ええ、そのようで」

「だが、それは今更改めて指摘されるまでもなく、私はいつだって機嫌がいいのだ。広宇須、分かるか？ 私は分かりきっていることをいちいち指摘されるのはあまり好きではないのだ」

「そ、それはそれは……」

先輩の眉間にしわが寄る。

まずい、余計なことを言っただろうか。僕は言い訳の言葉を探す。しかし、先輩はそこで表情を一変、いきなり笑顔になり、凶悪にハッハッハと笑った。

「だが、今日はその機嫌がいつにも増してすこぶる良いのだ。そこに気がつくとはさすが我が愛すべき後輩だな、広宇須。やはりお前は私が見込んだだけはある」

と、僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「何しろ今日はこれから屋上で……はっ、広宇須」

「は、はひい！」

瞬間、僕は先輩の目がじろりと背後に立つ人物を捉えたのが分かった。

まずい、僕から興味が逸れた。

「そっちの娘は誰だ」

「だ、誰のことです？」

僕は一步先輩に近づきつつ、背後のひつぎを隠すことにした。

「とぼけるな、お前の後ろにいる女だ」

「な、何を言いますか。ここには僕と先輩しかいませんよ」

「馬鹿を言え。ほら、お前の後ろに」

「いませんって」

「広宇須、お前、いい加減に……」

ピリピリとした怒りを肌で感じる。

さすがに黒宮先輩もしびれを切らしてきたようだ。このままでは、ひつぎを隠し通せない。だが、背後からの声で、僕の努力は砂塵に帰すことになる。

「あ、あの……」

ひつぎだ。

「あなたが、黒宮先輩ですか？」

僕がとぼけるより先に、ひつぎが勝手にしゃべった。こら、僕が紹介するまで一切しゃべらずに待てとあれほど言ったのに。

「何だ、お前は」

先輩は僕の肩を押しつけて、ずいど彼女と対峙する。

「はい、私、日頃こちらの広宇須先輩に懇意に接してもらっている、一年の墓丘ひつぎという者です。本日は広宇須先輩の先輩であらせられる黒宮さんにご挨拶申し上げようと思い、参上した次第であります」

ぺこり、と礼儀正しく彼女は頭を垂れる。場の空気が急に引き締まった。彼女たちの間に走った緊張でそれが分かる。

僕は横目で先輩を伺った。

さあ、どうなる。

もはや、僕に墓丘の助太刀をするチャンスは残されていなさそうだ。

すると、

「そうか」

と退屈そうに呟いた黒宮先輩は、何を思ったか、いきなりにゆつとひつぎに手を伸ばして――。

「ひゃあっ！」

有無をいわず彼女の胸を掴んだ。

「な……！」

僕はあまりのことに絶句した。ひつぎも驚いたのか、口をぱくぱくさせて、耳まで真っ赤になっている。

「ふむ、なかなか小さいな」

しかし、先輩だけは冷静で、顎にもう片方の手を当てて、何を確

認しているのか、頷いている。

「Aないし、Bといったところか……」

僕は、その先輩のあまりの傍若無人な言葉に、目を剥く。これは明らかに初対面の人間にやっていいことの限度を遥かに超えている。超越しすぎて、先輩はこの世の神様なのかと錯覚しそうになったほどだ。

初対面の少女の胸を揉むだと！

そんなことがあっていいのか、と唾然としていると、

「ぐはあああ！」

今度はひつぎが血を吐いた。

どばどばと鮮血が視界を染める。

もちろん、それは単なる血糊でしかないのだが、一体口の中のどこに仕込んでいたのか、かなりの量が飛び散り、ひつぎの制服は血まみれになった。

こっちもこっちで何をしているのだ。

もはや、突っ込みを挟む余裕も、気力もない。この状況、いや、惨状には。

僕は思わず、一步退いた。

心の中は、どん引きである。

一瞬遅れて、周囲を見回した。どうやら、誰もいないようである。助かった。もしも、見られていたら、その対応に苦慮することは目に見えていたので、僕はほっとした。

救いようなない状況で唯一救われた瞬間だ。

「ふう……」

すると、そこで先輩が満足したのか手を引っ込めた。どこから出したのか、ハンカチで血糊のついた手を拭う。

その何事もなかったような振舞いが、先輩の先輩たる所以であると思う。普通の人間なら、いきなり目の前の人物が血を拭けば卒倒してしかるべきだろう。

しかし、この先輩の肝の座りようは尋常ではない。だから、こうしていつも冷静でいられるのだ。

彼女ならば、いきなり地球が真つ二つに割れようともちらとも表情を変えないのではないだろうか。

全く恐ろしいものである。

一方で、ひつぎはというと、さすがに先輩の行動に驚いたのか、たじろいでいた。血を吐いてもいつものように死んだふりをするのではなく、ただ呆然としている。

「ふむ、なかなか面白い奴だな、広宇須よくやった」

先輩が陽気に僕に話しかけてきた。

「何がですか？」

「こいつだ。この墓丘と言ったか？ こやつは劇団の新メンバーなのだろう」

「誰もそんなことは言ってません」

「そうか、ならば今決めた。こいつを我が劇団の団員に任命しよう」

ちょっと待て。

最悪のシナリオだ。これでは、彼女が先輩の第二の犠牲者になってしまう。

しかし、僕が反論の声を出さないうちに、先輩は僕の肩を軽く叩いて歩き出す。

「それでは広宇須、よろしく頼むぞ」

「ええと、はい？」

「後は任せた」

「ちょ、ちょっと先輩、どこに行くんですか？」

すると、先輩は満面の笑みを浮かべてこう言った。

「これから屋上で、自殺ショーが行われるのだ」

第二章 墓場に死体はつきものだ。 8 (前書き)

※今回の物語を読む前に。 『第二章 墓場に死体はつきものだ。

6』の修正部分を未読の方はそちらを先にお読みになることをおすすめします。お読みにならない場合、今回のストーリーとかが合わない点がございます。ご注意ください。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 8

屋上に駆け上がる階段の途中で、僕は急に学校のスピーカーのスイッチが入ったのが分かった。

ザーザー、という砂嵐のような音がする。

黒宮先輩の後を追ひ、呼吸を弾ませながら一段飛ばしで上つていったのだが、そのノイズ音にはすぐに気がついた。

階段の踊り場で立ち止まると、一旦後ろを振り返り、ひつぎがついてきているかどうかを確認した。

見れば、彼女は一階分下の踊り場で手すりに寄りかかって荒く息継ぎをしている。

「せ、先輩……」

と弱々しく頭を上げてこちらを見返した。

「あの、スピーカーが入ったみたいですけれど」

「ああ。みたいだな。これはもしかするとひよっとするかもしれない。静かに聞いてみよう」

そうして、僕は耳をすませながら、先程の先輩の言葉を思い出す。自殺ショーが行われるという話を聞き、当然のことながら、「どういうことなのか」と疑いの眼差しを向け、説明を要求する僕らに対し、彼女は面倒くさそうに振り返り、こう言ったのだ。

『私はここで、あからさまに信じていないお前たちに対し、ショーの真実を巡って、嘘だ本当だ、などという不毛な言い争いをするつもりはない』

だから、

『代わりに、お前たちに信頼性のある具体的な情報を特別に教えてやる。信じるか否かはお前たち次第だ』

そうして、先輩は三本、指を立てた。

その一――。

その人物は、三年生の男子生徒である。

その二――。

自殺は飛び降りて、学校の屋上で行われる。

その三――。

自殺はこれから校内放送で予告される。

先輩は得意な顔でそう言うとき、まだ理解出来ずに苦しんでいる僕らを尻目に、「今に私の言った意味が分かる、さらばだ」と階段の方へ姿を消してしまった。まるで嵐のような人である。

その後には、当然、僕とひつぎだけが残されたわけなのだが……。大して話の内容を考えるまでもなく、僕は教室に引き返そうとした。なにしろ、あの先輩の言う事である。きっと性質の悪い冗談に違いないと思ったのだ。

しかし、隣で制服を血糊で汚しているひつぎはそうは思わなかったように、真剣な表情でその話を吟味し、

「先輩、私たちも行きましょう」

と手を引いてきた。

「なんだよ、あんなの先輩のいつもの悪ふざけだよ」

僕はそう言っただけ息を吐いた。

「僕らに適当な事を言って振り回すのは、先輩の趣味なんだから」

しかし、ひつぎの自信に満ちた眼差しは変わらない。いいえ、と首を振り、思案を巡らせているようだった。

僕はそれを見ながら、彼女が時折見せる、その純粹な真っ直ぐさについて考えた。

彼女に行動を起こさせるそのエネルギーは果たして、どこから来ているのか。

おそらく、彼女の中に潜む生来のポジティブさこそが、その源なのだろう。僕はそう思う。

恐ろしく底なしな前向き根性。

自己に対する絶対で不変的な肯定。

それが彼女という人間の行動を決定する上で、一番の要となっているに違いない。

しかし――。

しかし、それが常に最良とは限らない。僕はそうとも考えた。

なぜなら、その性質が当の本人に対して、時に独りよがりな考えを押し通させてしまう危険性があるからだ。

今の彼女がまさにそうだと僕は思う。自分の考えを肯定して、ちらとも疑わない状態である。

ここは先輩である僕が、その間違いを指摘しなければ。

「あんな、墓丘……」

しかし、諭そうとして、彼女に言い返される。

「先輩、思い出してくださいよ」

「何を？」

「三年の男子生徒、です」

それがどうした？

僕は聞き返す。

「私たちはごく最近、その言葉を耳にしています」

「いつ？」

「昨日のことです。ほら、あの先輩の先輩、跳治さんでしたっけ。あの方が私たちに聞いてきました。『三年の男子生徒を見かけなかったか』と」

なるほど、確かにそうである。橋の上で出会って彼は真っ先にそのことを僕らに訊ねたのだ。

僕は首を上下に振った。

すると、それに応じて、ひつぎの目がきらりと光った。

「さらに思い出してください。あの跳治さんがぶつぶつと深刻そうな顔で呟いていたことを。パニックになっているだの、説得するだのと言っていましたか……」

「ああ、そう言えば」

「これって、あの跳治さんが、何らかの問題を抱えたその『三年の男子生徒』をどうにかして立ち直らせ、助けようとしているように見えませんか？」

「……た、確かに」

「いいですか？　そこに、先程、黒宮先輩の言った『三年の男子生徒』です。これは単なる偶然の一致でしょうか？　いえ、私はそうは思いません」

彼女は人差し指をぴんと立たせる。

「先輩、黒宮先輩の言う人物が、昨日の跳治さんが助けようとしている相手であると仮定してみてください。それならば、黒宮先輩の

言ったことになん信ぴょう性が出てくると思いませんか？」

つまり、彼女の言いたいことはこうである。

何らかの問題を抱えた三年の男子生徒がいた。彼はその問題について深刻に思い悩んでおり、それは自分が死ぬか生きるかを選ぶほどの重大な問題だった。

そして、その事実を知った跳治先輩は昨日、彼を何とかして救おうとあれこれ策を講じた。しかし、それがことごとく失敗。彼の抱えた問題を解決するには至らず、ついに思いつめた彼は今日、自殺をしようと決める。

そして、黒宮先輩は前もってその情報をどこから仕入れた。

それが、一連の事柄から読み取れる彼女が描いた事の顛末である。僕はそれを聞いて深々と頷いた。

確かに、その通りかもしれない。

ひつぎのその推理は、単なる空想であり、絶対と言える証拠はないものの、少なくとも、矛盾している点はない。それが自然に思えるほど、きちんと筋が通っていた。

「ということは、黒宮先輩の言う事は、本当なのか？」

「ええ、その可能性が高いとみていいでしょう。もし仮に違ったとしても、確かめに行くだけの価値は十分にあります」

「あ、ああ……」

そうだな、と僕はぼんやりと生返事をした。

しかし、こいつ、何という頭のキレだろう。まるで、主人公みたいだ。つい昨日、鼻にティッシュを当ててやった彼女からは想像もつかない鋭さである。

そんな風に思っ僕がひつぎを見つめてぼーっとしていると、彼女に脇腹を小突かれた。

「ほら、先輩、しっかりしてください。絶対にその人を死なせてはいけませんよ。早く屋上に行きましよう！」

第二章 墓場に死体はつきものだ。 9

——もしもし、もしもし。

ああ、電話じゃなかった。これ、放送してるんだっけ。しまったしまった。

あ、あのー、き、聞こえますかー？ みなさん。学校にまだ残っているみなさん。

もし聞こえたら返事をしてください。って、これ電話じゃないのに。くうううう、何やってんだろ、僕。

あの、突然こんな放送して、すいません。最初に謝っておきます。個人で勝手に放送するには、先生方の許可がいるようなのですが、今日はその過程をフツ飛ばしました。いろいろと面倒臭いので。だ、だって、放送で自殺の予告をするなんて言ったら、先生たち普通怒るでしょ……って、ああ、まだこれは言っちゃ駄目だった。

あの、すいません。えっと、今日僕これから自殺しようと、思います。はい。

あのー、質問がある方がいらっしゃいますでしょうか。いたら、手を上げて下さい。

って、放送中だから皆が手を上げてるかどうかわかんないじゃないかー。ああもうダメダメだー。

すいません。ええと、仕切りなおして、と。これから僕が自殺する理由を発表したいと思います。

僕が自殺するのは、好きな女の子に振られたからです。はい。昨日のこと、なんだけれどね。下駄箱にラブレターを入れてさ、僕はある女の子を呼び出した。その子に好きですって告白したんだ。とても勇気があることだよ。だけれどね、その子、僕にお断りの返事をした。あんたみたいな奴、何とも思っていないわよだってさ。彼氏とかありえないだってさ。だから、僕はすごく悲しくて、人生が嫌になったんだ。

なんだ、そんなことかよ、って思った人いるでしょ。俺なんて、ずっと振られっぱなしだって思った人いるでしょ。

けどね。僕はさ、多少のショックでも心の大きな傷になっちゃう人間なんだ。ポジティブな人間じゃない。残念だけれどね。本当に、嫌なんだけれどね。僕は生まれつきのネガティブ人間なんだ。

なにより、僕はポジティブって言葉が嫌いだ。もうほんと、大っきらい。だって、何をやっても結局失敗するんだ。僕は生まれつき不器用で、頭が悪くって、トロいって言われてる奴さ。そんな人間がいくらポジティブに頑張ろうたって、そもそも無理な問題なんだよ。結果が見えてるもの。また失敗なんだろうって。

けれどね、実は今回自殺しようって思ったのは、ただそれだけが理由じゃないんだ。

そう、あ、あ、あ、あいつが、あいつがいけないんだよ!!

うう。くそ、今思い出してもむかつくなあ。あいつ。ううううううううう。むっかつくうううううう!!!!

僕よりも勉強が出来て、運動も出来て、何をやっても要領が良くて、完璧。皆が羨む可愛い彼女もいる。そんな野郎がさ、振られた僕に言うんだ。

ポジティブになれって。失敗は成功の元。また次があるから。へこたれんなって。

ねえ、ねえねえねえねえねえ！！ 皆ならどー思う？ ねえ、どう思う？ 自分よりも何倍も完璧な人間がそんなことを言ってきたら。ぜーんぜん、励ましになんてならないよね。ね。笑っちゃうよねー。お腹抱えて笑っちゃうよねー。何言ってるんだ、この完璧野郎が、って思うよねー。僕なんか説得するくらいなら、テストで満点取ってろ、ばーか。って思うよねー。

僕はね、そこでぶっ飛んじやったんだ。うん、そうだよ。僕はもう、こんな奴がいる世界なんてどうでもいいって思ったんだ。ふざけてるってね。その時、そう思ったんだ。

この学校の校舎から飛び降りてやろうって。ぐふふふふふふふふふ。

あいつはさ、きっと完璧だから、僕が自分の説得によって立ち直るって本気で思ってるはずだよ。

馬鹿だよね。ほんっっっっつと馬鹿だよね。

僕、これから死ぬのに。

説得なんて、大失敗なのに。

僕は、あいつに、後悔させてやるんだ。あいつみたいな奴が思い

上がって、他人を立ち直らせることが出来るなんて、少しでも思っ
た事。

そして、死ぬことによって僕がああ完璧なあいつの人生に唯一す
すぎ切れない汚点となるんだ。それってきつともちいいだろうな
ああ！！

あいつ、僕が死んだって知ったらどんな顔するかな。楽しみだな
あ。あの世からその顔拝んでやるから、ワクワクしながら待つてよ
ーっと。

それじゃあね。これで放送はおしまい。

バイバイ。みんな――。

階段を駆け上がると、僕とひつぎは迷わず屋上への扉を開け放っ
た。普段ならば鍵が掛けられ、開くことの出来ないその扉が事もな
く開く。その事実が、僕に先ほどの放送が単なる冗談ではなかった
ことを示していた。

つまり、今夕、この通い慣れた学び舎の屋上から飛び降りる馬鹿
がいる。絶対にいる。

僕は確信した。

屋上は、強い風に吹かれていた。夕焼けの空を雲が川のように頭
上を流されていく。

僕は扉を開けたものの、その風に思わず目を閉じかけた。が、そ
の先に一瞬人影が見えたのに気がついた。

やはり、いた。

エアコンの室外機や高架水槽がごちゃごちゃと設置されているエリアのさらに奥、フェンスのない開放された空間に、その少年は立っていた。

僕は思い出す。あれはちょうど、以前僕が先輩によって突き落とされた場所だ。

しかし、今はそんな思い出など、回想している余裕はなかった。その場所に佇む少年の顔を僕は見たのだ。

彼の表情は、冷たく青ざめていて、静かな決意が瞳の奥に暗黒の渦を巻いているように見えた。

ゾッとする冷気が背筋を駆け上る。やはり、彼がこれから飛び降り自殺をするという例の少年らしい。

マジかよ、と口先だけが動いて言葉を作った。

冷汗が眉間を伝う。

本気でそんなことを、するつもりか？

「先輩」

ひつぎが居ても立ってもいられない様子で、僕の服を引っ張った。

「とにかく、様子を見に行きましょうよ」

「あ、ああ」

僕は少々強引なひつぎに引きずられるようにして、前進した。

その途中で、背後が俄に騒がしくなったのが分かる。どうやら先程の放送を聞いて、事の真相を確かめに、教師や生徒たちが集まってきたらしい。あつという間に、その場に興奮と恐怖の緊張が走った。強風の合間を縫って、人々の騒ぎが聞こえてくる。きつと、今にそのパニックは学校中を駆け巡ることになるだろう。

と、そう思った次の瞬間。

その少年の視線が近づく僕らを捉えた途端、ものすごい剣幕で怒鳴ってきたのだ。

「ち、近寄らないでください!!」

敬語だが、そこには刃物を振り回しているような危険に満ちた気迫があり、僕は思わずたじろぐ。

「それ以上近寄らないでください、僕はこれから自殺するんです!!」

ひつぎの足が止まる。背後から彼女が悔しそうに踏み出しそこねた足を元に戻すのが見えた。僕は彼女を逆に引っ張って、背後に引き返そうとした。とにかく、今、あの少年を刺激するのはまずい。決断を早まらせてはならないのだ。

こういうときはできるだけ時間を与えて、冷静にさせるのが吉である。

「墓丘、戻れ」

しかし、彼女は首を横に振った。

「先輩、あの人を死なせてはいけません」

「分かってる。だから、今はその方法を探るために一旦、戻るんだ」

「事は一刻を争います。そんな時間はありません」

「馬鹿、そんなこと、僕にだって分かってら!!」

全く、相変わらず頑固な少女である。聞き分けのないことこの上ない。僕は彼女の腕を押さえて、無理やり引きずるようにして少年から遠ざけようとした……その時だった。

「その哀れなる自殺志望の少年よ！」

今度はどこか高い場所からまたしても聞き覚えのある女性の声が響いた。

興奮に満ちた人だからから声が飛ぶ。

「誰だ？」

「きゃあ、何よ！」

「あそこだ、あそこ！」

「うわ、あいつって確か劇団の……」

嫌な予感がする。

見上げれば、高架水槽タンクの上に、すらりとした人影があった。一体、いつの間に、そんな場所に上ったのか、その人物を目が捉えた瞬間、僕は気が動転しそうになった。

最悪だ。予感的中である。

「だ、誰ですか、お前！」

屋上の端で少年が狼狽する。少年から先輩までの距離は数メートルほどの場所だっただけに、その出現には驚いたのだろう。

僕が彼の立場ならびっくり仰天して、そのまま屋上から落っこちてしまうかもしれない。

すると、むふん、とその人影は偉そうに鼻息を飛ばす。

「私か？ 訊かれたならば答えよう。そして、覚えておくがいい。

私は世界一完璧な美女にして劇団レディーバードの団長……」

赤のメッシュが入った黒髪を靡かせて、彼女は叫ぶ。

「黒宮赤灯だ！」

第二章 墓場に死体はつきものだ。 10 (前書き)

※しばらくの間、ネットが使えない状態になるため、その間更新がストップします。再開予定は未定ですが、二三週間以内にはまた更新できるようになると思います。ご了承ください。

第二章 墓場に死体はつきものだ。 10

「とうっ！」

観衆が次なる行動を固唾を飲んで見守る中、黒宮先輩はそう叫んで、いきなりそのタンクから飛び降りた。

物語のアクションヒーローさながらのポーズで、とたん、とコンクリートの地面に着地する。そして、無言のまま、自殺志願の少年へとじりと詰め寄った。

少年はその時まで、我を忘れたように呆然と黒宮先輩を見つめていたが、接近されると感じるや否や、慌てて先輩から身を引いて距離を取った。素早く屋上の端の段差に足を掛け、

「僕の邪魔をしないでください！」

と強く叫ぶ。

どうやらそれ以上近寄ると死にますよ、という威嚇らしい。

少年の表情は先ほどよりも一層青ざめており、必死なのが判る。

しかし、それに相反して、先輩の表情は至って涼しいものだ。今まさに、少年の生死を分かť非常に危険な駆け引きが行われている最中であることを理解しているのか、それがどうしたという具合に口笛すら吹き始めそうな脳天気な気配があった。

「お前は死ぬのか」

先輩が口を開いた。

「確か、死ぬんだよな」

「な、何ですか、説得ですか？」

どもりながら少年が言葉を返した。

「説得に來たというなら無駄です。僕の意味が変わることはありませんから。僕は今からここで衝撃的に死んで、僕を立ち直らせようと思ひ上がったことをしたあの男を後悔させてやるんです！」

お前たちの低劣な罠になど引つかかるかと言いたげに、少年は唾を飛ばした。僕にはそれが、窮地に追い込まれた獣のように見える。しかし、先輩はそれでも動じない様子だった。

それもそうだろう。僕は思う。

十中八九、この先輩の目的は、少年の説得などという常識的なものではない。

事実、

「そうか」

とどうでもいいことのように先輩は言った。

「は？」

少年の口があんぐりと開く。

おそらく、僕の背後で様子を見守っているやじうまたちも同じ表情をしていることだろう。

「私は別に、お前がどんな理由で死のうとしているのか、とか、どうやったら死ぬの思いとどまらせることが出来るか、などといった些事には興味がない」

いつもの黒宮節で語りつつ、品定めをするように先輩は少年を眺

める。

「私が興味があるもの、それはお前の死だけだ」

その瞬間、少年が前のめりに倒れそうになったのが見えた。
うんうん、気持ちは分かるぞ。

「説得に来たんじゃないのかよ！」

先ほどの丁寧な口調も忘れて、少年が叫ぶ。

「なんだよお前、空気読めよ、こういうときは悩める少年であるこの俺を説得するのが燃える王道的展開ってもんだろぅが！」

おいおい、勢いに乗ってこの少年は何を言ってるんだ。今度は僕がずっこけそうになる。

もしかして説得されたいの？
すると、

「王道的展開など糞食らえだ！」

黒宮先輩は唾を吐き捨てる勢いで言った。

「私が求めているのは混沌だ。予測できる未来になど何の意味がある。何の価値がある。分からないからこそ、世界は面白いのだ。楽しいのだ。それこそが全てであり、それ以外のものに、私は興味はない。さあ、予測できない死に方で私を楽しませるのだ！」

「なんで、そんなことをしなくちゃいけないんだよ。俺はお前のために死ぬんじゃないんだよ！」

最もな意見である。

全く、この先輩、いきなり現れたと思えば……いつも通りの傍若無人、厚顔無恥ぶりである。先輩が予想外に場のシリアスな空気を引つ掻き回してくれたせいで、少年とコントをしているようにも見えた。ああ、もはや僕の手には負えない。なんとか隙を窺ってこの場から逃げ去ってしまいたい気分だ。

しかし、僕はそこでこれがある意味では理想的な状況を生み出していることに気がついた。言い合いが続いている今ならば、少年の注意は先輩の方へ百パーセント向いている。つまり、僕らは完全にフリーなのだ。

上手くこの状況を利用すれば、あの少年を取り押さえることが出来るかもしれない。

「おい、墓丘。チャンスだ。今のうちにあいつの背後に回りこむぞ」

しかし、僕ははっとした。

つい先程まで、腕の中で抑えつけていたはずのひつぎがない。しまった。先輩の様子に注意を奪われるあまり、ひつぎを抑えつける力が緩んでいたのだ。どうやら、既に彼女は僕の腕から抜け出ていたらしい。

「墓丘！」

見れば、彼女はするすると走って黒宮先輩の隣に駆け寄っているところだった。そして、そんな彼女がずっと二人の間に割って入り、律儀に手を挙げる。

「ちょっといいですか」

「な、なんだ？」

またしても妙な闖入者に戸惑いつつも、これまた律儀に少年はひつぎを指名した。

「文句があるなら言ってみやがれ！」

「はい、死ぬのは良くないと思います」

まるで教師に向かっていているように、ひつぎは背筋をぴんと伸ばして姿勢を正しながら、答える。小柄な体つきなためか、どこか精一杯発言しているように見えるのが可愛い。

すると、少年はなぜかそこではっと感じ入ったように息を止め、目尻を潤ませた。

「そ、そうだな。その通りだよな。お前は全くもって正しいよ。俺はこういう普通の対応が欲しかったんだよ」

確かに死ぬのはよくないよなあ。

ほう、とため息混じりに呟く。

なんだよ、お前は何がしたいんだよ。

僕は突っ込みを入れたくなる。

自殺するのがあんたの目的なんだよな。

と、そこで動きがあった。少年の目がふいにひつぎの制服を見たのである。瞬間、目が一回転するかと思うほどぐると動いたのが分かった。

「お、お前、血が！」

そうだ。忘れていた。ひつぎの制服には先ほどの血糊の汚れがべつとりと付着しているのである。先輩は別として、普通の人間ならば、見ただけで何事かと慌てふためくことだろう。

そして、今まさに目の前の少年がその状態にあった。

「お前、病気なのか？　ど、どうして血が出ている！」

と、震える指で制服を指差す。ひつぎも指摘されて自分の服の胸元をつまみ、あっと気がついた。

「あ、ああ、ご心配なく。これは偽物です」

「はあ？」

「実は私、死体に変装するのが趣味なんです」

瞬間、その場の空気が凍りついた。

僕の額に嫌な汗が垂れる。

「シタイニ、ヘンソウ？」

「は、はい」

ば、馬鹿、答えるな。

「……な、なんだよそれ、じゃあ、その服は血を吐いてぶっ倒れる練習でもしてたってか？」

「え、ええと、まあ」

すると、たっぷり三十秒の沈黙を経て、少年が絶叫した。

「こ、こ、こ、こいつ、普通じゃねええー！！」

屋上中に、彼の声が響く。

「死体に変装するのが趣味とか、こいつ、頭のネジ飛んでるんじゃないか。最高に気色悪いー！！」

すると、それに同意するように、俄に僕の背後の群衆もざわつき始める。

「おいおい、聞いたかよ。意味が分かんねえ」

「死体に変装、マジで？」

「うわー、可哀想な人」

「嘘でしょ、あれってうちのクラスの子じゃん、近寄りたくないなあ」

露骨な嫌悪感が生徒たちの中からもややと立ち昇るのが僕には分かった。ひそひそと隣同士で言葉を交わし、ひつぎの異常さについて共感しあっている。

今や、この場の注目は、少年でも黒宮先輩でもなく、突如現れた墓丘ひつぎという少女に向けられていた。黒々としたたくさんの影と視線が小さなひつぎを包囲していくのが分かる。

僕の位置から、小さなひつぎの肩が震えているのが見えた。

怖がっている、のか？

あの、ポジティブシンキングなひつぎが？

僕は一瞬疑問に思うが、そりゃそうかと納得する。

こいつは、こんなに他人から注目を浴びたことがないんだから。

一人の友達だって上手く作れないくらいに、不器用な奴なんだから。無理もない。

いくらポジティブな人間にだって、恐怖の感情がないわけがない。悲しみが無いわけがない。怒りが無いわけがない。

特別明るいわけでもないし、いつも笑ってるわけじゃない。

僕と同じ、人間なんだ。そう、ごく普通の。

僕は彼女の背中を見つめた。

彼女は今、とても心細い気持ちになっていることだろう。この大衆の前で、自分の最大の秘密を暴露してしまったのだから。

おそらく、ついその場の流れで口に出てしまっただけで、彼女としては話してしまうつもりはなかったに違いない。

しかし、その事實は、今や学校の多くの人間の耳に入ってしまった。きっと明日一日もかからないうちに、彼女の情報は構内を駆け巡ることだろう。

学校中の人間が、ひつぎに嫌悪の視線を向ける様が、僕の眼前に映しだされた。皆が、彼女が普通じゃないと後ろ指を差して、笑う、そんな様が。

「……！」

と、少年が、きいきい声を上げながら、下品に騒ぎ立てるのが僕には見えた。ひつぎをコケにして、楽しんでいるのが見えた。

あいつが、この騒ぎに火を付けている！

余計なことをしやがって……。

その瞬間、僕の中で、ふつふつと熱い何かが沸き上がってくるのが分かった。

ふざけんなよ。

ふつざけんな！

こんなこと、僕が許さない！ 絶対に許さない！

ぎゅつと拳を握りしめる。強く、握りしめる。

好き勝手なこと言いやがって。お前がひつぎの何を知ってるって言うんだ。あいつは、あいつは、どこまでも真っ直ぐに純粋に強く生きたがってるんだ。

お前なんかそんな生き方が出来るか？ 他人を恨み、妬みなが

ら死のうとしているお前に。

なあ、教えてくれよ。

少なくとも、と僕は思う。

彼女は、自分の命を投げ出そうとしている男なんかより、数百兆倍素晴らしい、いや、比べることが失礼になるくらい、ひつぎは見習うべき勇気のある人間だ！

馬鹿に、すんなよ。

馬鹿にすんな。

馬鹿にすんな！

「馬鹿にすんな！！！！！」

気がつけば、僕はそう叫んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6682w/>

恋に脇役はツキモノだ。

2011年12月16日21時57分発行